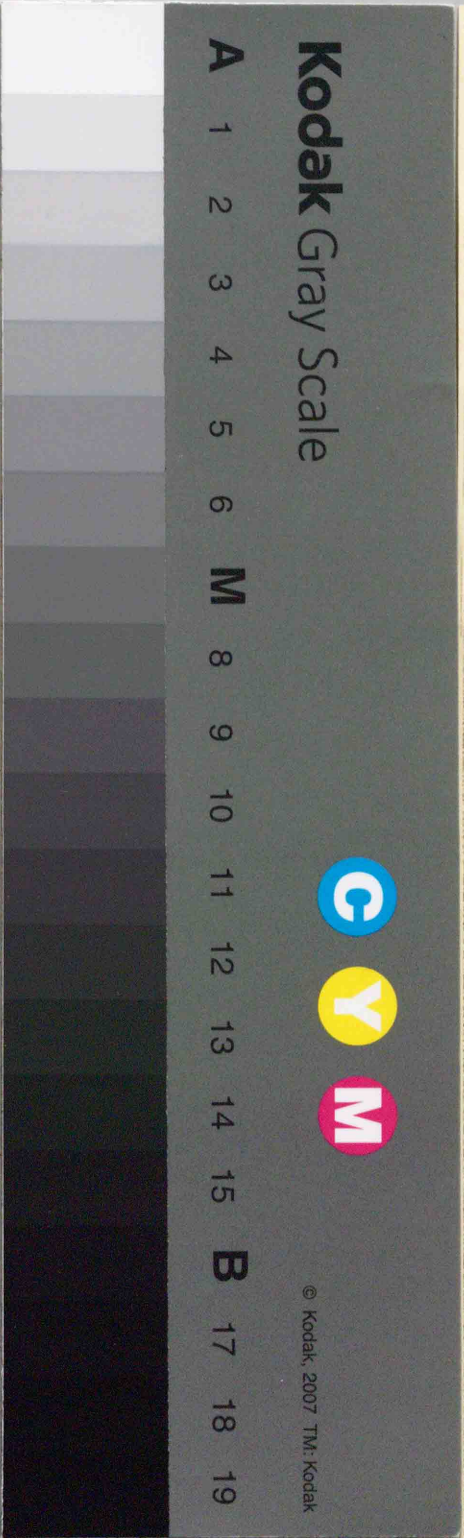
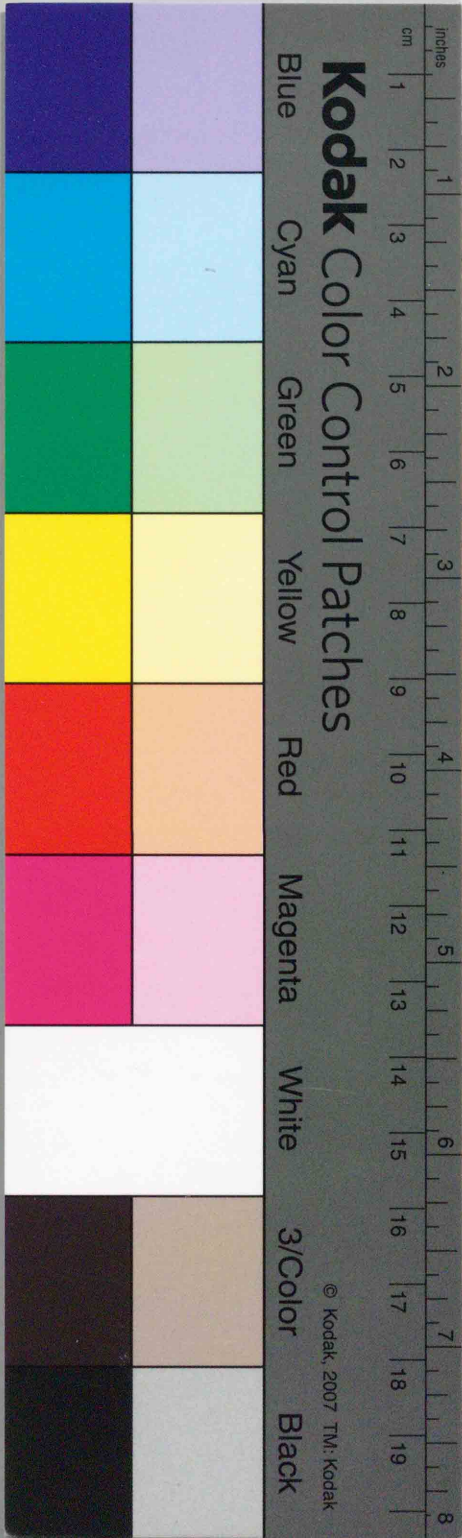
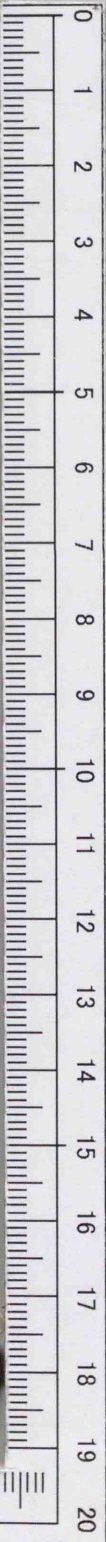


教科書文庫
4
810
41-1927
2000090695

編吉則波八
現代國語讀本
(修正版)
卷六

版藏館成開京東



41428

教科書文庫

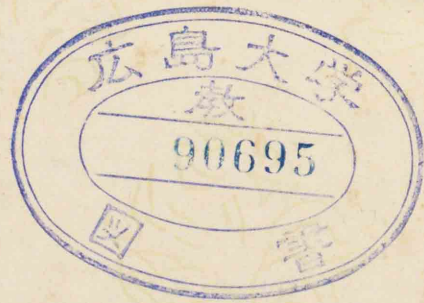
4
810
41-1927
20000 90695



文部省檢定
昭和二年二月十五日
中學國語教科用

教科書文庫
4
810
41-1927
2000090695

八波則吉編
現代國語讀本
(修正版)



東京關成館藏版

広島大学図書
2000090695


資料室

4a
810
B2

現代國語讀本
(第三期)

現代國語讀本 卷六

目次

一 日本の風姿(詩)	土井 晚翠	一
二 武藏野の今昔	熊田 葦城	四
三 鹽原	尾崎 紅葉	九
四 同胞兄弟(自修文)	(噫) 無情	一五
五 泉(詩)	山 宮 允	二七
六 草雲雀	小泉 八雲	二六
七 霧のロンドン	野口米次郎	三三
八 性格描寫(自修文)		四
一 我が母		四三

目次

二 我が兄 四

三 自 己 四

九 友 〇 よ (詩) 千 家 元 鷹 五

一〇 己が影 (今昔物語) 五

一一 扇の的 (平家物語) 五

一二 天徳寺琵琶を聴く 松 平 定 信 三

一三 松葉仙人 (千訓抄) 六

一四 近世の和歌 (和歌) 水 上 瀧 太 郎 七

一五 新文學の先驅者 森 鷗 外 五

一六 サフランと私 (自修文) 上 原 敬 二 九

一七 風と雨 一 風 九

二 雨 二 雨 三

一八 雲 (詩) 松 原 至 大 九

一九 雪前雪後 幸 田 露 伴 七

二〇 葛温泉より (候文) 大 町 桂 月 一〇

二一 河水清 (天正十五年新年勅題) 尾 上 八 郎 一〇

二二 歌御會始拜觀の記 尾 上 八 郎 一〇

二三 近代の俳句 (俳句) 尾 上 八 郎 一〇

二四 失禮仕候 (自修文) 土 岐 善 麿 一五

二五 生命の雄辯 永 井 柳 太 郎 一四

二六 法 難 (脚本) 坪 内 逍 遙 一三

二七 日蓮上人 高 山 樗 牛 一四

二八 友の墓邊 姉 崎 嘲 風 一五

二九 椰子の木の評釋 川 路 柳 虹 一五

三〇 貴族院議事傍聽記 (自修文) 中 村 武 羅 夫 一六

三一 近代の和歌(和歌)……………一七

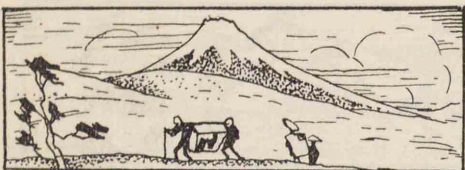
三二 淺春雜筆……………吉田絃二郎…一八

三三 新帝踐祚……………一六

三四 長慶天皇……………芝 葛 盛…一九〇

現代國語讀本 卷六

土井晚翠
名は林吉、
臺市の人、
治四年生、
文學者、第
高等學校教
○この詩はイ
タリ一の詩人
に寄せた長詩
の一段である
廣重
歌川氏、號は
一立齋、江戶
時代後期、浮
世繪師、安政
五年(一八二六)

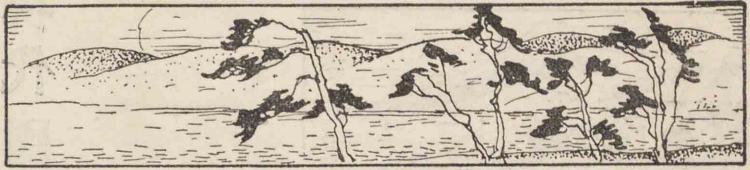


日本の風姿

花に埋るる紅の霞の春は遠くして、
今錦繡の秋飾る紅葉も菊も移ろへど、今は冬
東海の驛五十三、昔の生ける影、
舊き都の雪の朝は、三十六の峯並ぶ
下は賀茂川冬枯の流さびしとかこつ時、
別に戀歌の春ぞ湧く、
山陽の岸一百里、長汀曲浦一々の
うねり新たな水と山、微妙の姿見るところ、

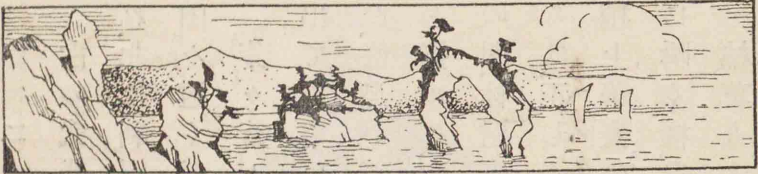
土井晚翠

メシナ
Mesina, イタ
リ島のシハリ
ナポリ
ナポリ
ナポリイタ
リア南部の都
会
マグナ、グレ
シヤ
Magna Grae-
cia, 南部イタ
リアに於ける
古代ギリシヤ
の植民地
エトナ
Etna, シハリ
島の火
山
タオルミナ
Taormina, シ
リ島の東
岸
三保の浦
静岡縣安倍郡
耶馬の溪
大分縣下毛
郡山國川の
溪谷
天龍
長野縣靜岡
縣を流れる
里川、長さ六十



メシナナポリと影いづれ。
マグナ、グレシヤ跡残す
並ぶはこゝに三保の浦
芙蓉の嶺の下にして、
羽衣の舞見しものがたり。
西海越して耶馬の溪
共に比べて東海の
東北の山波の如く起伏して
十和田の湖水仙の郷、
東北の陸盡くる處、
万丈の巨巖怒濤を呼び、
千里の潮矢の如く
南溟遠く湧きたちて、
エトナの下のタオルミナに
千秋の雪照りわたる
むかし仙女の霓裳の
神斧刻める石の山、あつて
天龍の峽幾十里、まついて
溪に湛ふる明鏡の
ラゴ、マジローを想ひ出ん。
山は黄金の名に出でて、
鯨鯢躍る暗緑の
米大陸に通ふところ、を
寄する暖流洋々と、

十和田
秋田・青森兩
縣の境にある
ラゴ、イタ
Lago, Maggi-
ora, イタリ
北部の湖水
山
金華山、宮城
縣牡鹿半島の
東南方の島に
ある
オコック海
Okhotsk, 北海
道の東北方の
海
タスカローラ
Tuscarora,
島に近い海
床、その最深
部は八五三
メートル



多くの魚をひきつづけて
水の百靈率あつて、
潮に混じり逆捲きて、
万仞の淵タスカローラは
巨濤駭浪空を拍ちて、
巨大の船もよろめかん。
争きほひ紛擾の
青螺幾百、松島の
あゝ山聳え水流れ、
姿おのゝ疑らす中、
松島の美を聞かざらん。
傾國の美の隠れざる
的東西千万の
オコック海の寒流の
雲蒸し波湧き風荒び、
太平洋の名を外に、
海の堅城万噸の
その一面は足れりとや、
一灣彼方微笑を湛ふ。
深きは湛へ、玲瓏の
たそ、蓬萊の影留むる
東奥遠く隔つれど、
跡はた斯くか、憧憬の
人の思に往き通ふ。
(天馬の道に)

熊田葦城
名は宗次郎、
福山市の人、
文久二年生、
著述家

二 武藏野の今昔

熊田葦城

古の武藏野は草の海なり。西は秩父に起りて、東は海灣に劃られ、北は利根川に臨み、南は相模野に隣す。天濶く、地坦かにして、唯山々遠く低く之を繞る。

草より出で
武藏野は月の
入るべき山も
なし草より出
でて草にこそ
入れよみ人
知らず

莽々蒼々たる大草原、遠く長空に接して涯際を見ず、月は草より出でて草に入り、虹は原より起りて原に跨る。歸雲空しく野に迷ひ、倦鳥いづこにか翼を休むる。南薰草葉を渡りて、碧波ゆらくと揺めき、金風蘆花を掠めて、白浪はらくと碎け散る。一望蒼茫の間、林樹鬱蒼として茂れる小丘、二つ三つ四つ此處彼處に散在せるは、正しくこれ陸上の孤島。林外鯨鐘の吼ゆるは古寺のある處、梢上華表の聳ゆるは荒廟のある處。夜陰冥色を破りて燈火の風に瞬く様、自ら漁火の幽趣を帶ぶ。枯草人よりも高く、白日夜よりも寂たり。邑遠くして馬牛影稀

火風(夏)
水(秋)
木(冬)

滄海
更出桑田變
成海(劉延
芝、代悲白
頭翁)



灌道田太

に、家疎らにして雞犬聲閑けし。野徑縱横に通じて、旅客東西に迷ふ。纔に富岳を望んで馬首を進むるもの、恰も舟人の北斗を仰いで楫路を定むるにも似たり。若しかの草色水の如く、雲影波の如き處、布帆風を孕んで江流を下るを見ては、誰か草の海に非ずと言ふものぞ。奇なるかな、信州には雲の海あり、備後には霧の海あり、我が武州には此の茫々たる草の海あることや。然れども、雲霧は朝暮に變じ、滄海なほ桑田に變ずるを思へば、草の海又何ぞ變じて花の都となる時なからんや。

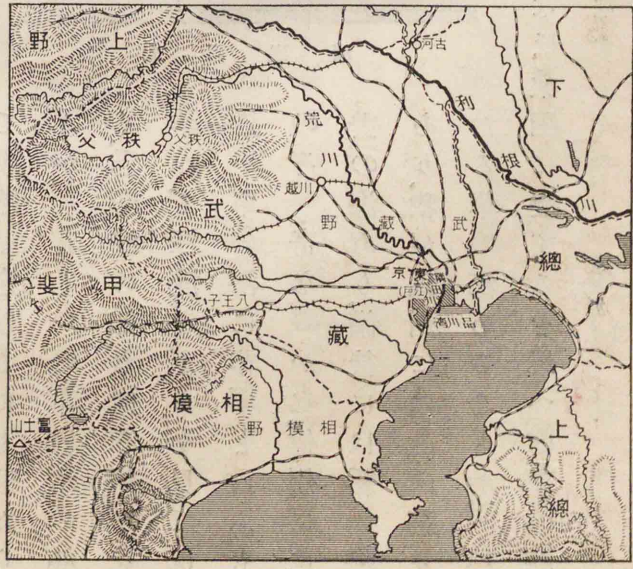
漢國史天築細柳 周思夫

太田道灌
名は持資、上杉正の臣、十五歳歿、年五

楓宸
皇居のこと。
「楓木、漢宮殿中多植之、故稱「楓宸」(説文)

日徂き月往き、星移り物換りて、世も變じ時も遷る。太田道灌一たび此處に城を築きてより、前に狐兔の巢窟たりし草原は、一變して霸王の柳營となり、再變して聖皇の楓宸となれり。看よや、四里四方、市塵軒を接して、炊煙雲に連り、八百八街、樓臺空に聳えて、燈光星に接し、晝は彩旗風に翻り、夜は電花天に映ずるを。眞個これ花の都に非ずして何ぞや。

古は草より出でて草に入りし大月、今は藁より出でて藁に入り、



瓦屋根

川越
武藏國入間郡
古河の足利氏
古河公方といふ古河は下總國猿島郡

要害にして
風光佳し

古は原より起りて原に跨りし長虹、今は軒より起りて軒に跨る。此の如き變化、天上の月も驚き、虹も驚き、雲も鳥も亦皆驚かん。何ぞ啻に地下の人のみならんや。

抑、江戸の地たる、武藏野の平原に在りて、奥羽の要衝に當り、品川灣、隅田川の江海を控へて、水陸漕運の利を有し、兵事上交通上最も優越なる地勢を占む。特に荒川、隅田川の水路によりて、川越、江戸の聯絡を保つ點に至りては、唯當の敵たる古河の足利氏を拒ぐに便なるのみならず、後の敵たる上州の上杉氏を制するにも亦甚だ利ありき。兵事上の知識に豊かなる道灌の江戸に取る所固より茲に在り。されど、文學上の趣味に富める道灌の江戸に誇る所は蓋し別に在るあり。

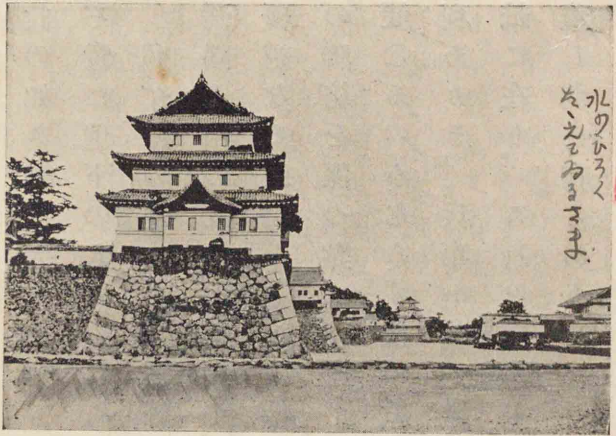
城上より西北の二方を望めば、武藏野の草原遠く天上の雲と連り、左には秀麗の富嶽その屏顔を露はし、右には崢嶸の毛山その雄

山の麓を流るる水

下
山

杜子美
名は甫、字は子美、唐の詩人

兵以靜勝
尉繚子の語



水のいろく
た、たのまきまよ

姿を示す。眸を東南の二方に轉ずれば墨江蜿蜒として品海に注ぎ、品海浩蕩として房山に接す。海は盆池の如く、舟は胡蝶に似たり。杜子美が窓含西嶺千秋雪。門泊東吳万里船と詠じたるは、正しく此の地の爲にせしもの如し。因りて西舎を含雪齋と稱し、東樓を泊船亭と名づけ、別に燕室を設けて靜勝軒と云ふ。これ兵以靜勝の語に取るなり。城樓全く成るや、道灌城代として此處に居る。一帯の江水を望みては敵を防ぐ所以を思ひ、數里の荒原を見ては兵を行る所以を思ふ。若しかの青山蒼海の絶景を

江 戸 城

海が庵はりかに

見出す
眺矚しては、詩思忽ち油然として湧く。
我が庵は松原つゞき海近く、

富士の高嶺を軒端にぞ見る。
これ城上展望の御事、其の文に長ずることなほ兵に老ゆるが如し。道灌これより致々として武を練り兵を鍛へ、徳を施し治を勵ます。遠近其の風を聞き、其の化を慕ひ、城下に來り集る者年毎に多きを加ふ。道灌來りてより、草萊の野變じて詞林の花を開き、狐兔の窟化して人煙の市となれり。これ正しく人の力にして、又時の力なり。(江戸懷古録)

三 鹽 原

尾崎紅葉
車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間の獨りに倦疲れつゝ、始めて西那須野

尾崎紅葉
名は徳太郎、東京市の文學者、明治三十六年三月十七日歿

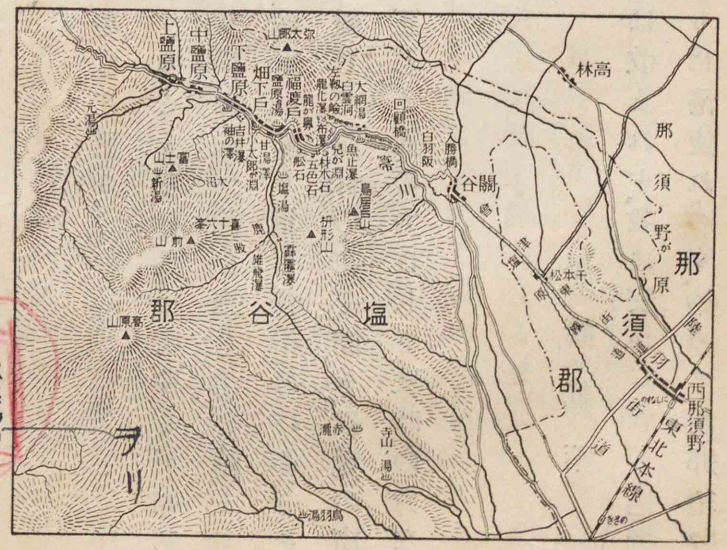
尾崎紅葉
名は徳太郎、東京市の文學者、明治三十六年三月十七日歿

登殿

天のまの
あみくれば
はるかに
はるかに

驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は潤く、地は遐に、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶかのみにして、三里の坦途、一帯の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮まらず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところに、深々の響ありて、これに架かるを入勝橋となす。

橋を渡りて僅に行けば、日光暗く、山厚く、壘み嵐氣冷かに、壑深く陥りて、幾廻りせる九折の後に

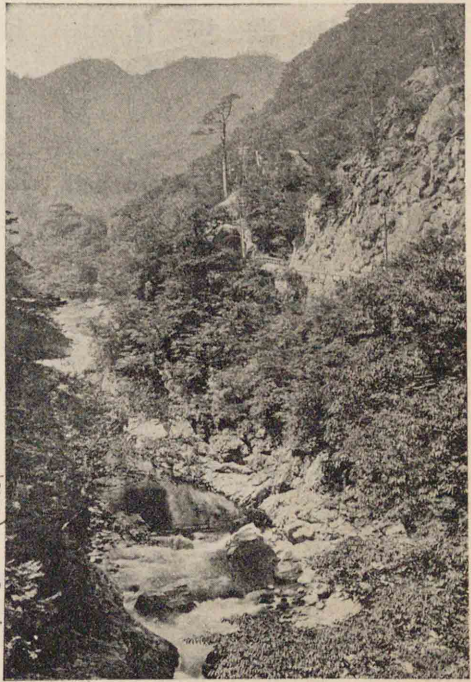


果てしなくくつろぎの「こゝろ」

この緒より
や
松風の音に
ひいづれの緒
めけん(齋宮)
女御拾遺集

應いあつて
呼ばれし

は、密樹聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を開き、愈登れば、遙に木隠れの音のみ聞えし流の氷上は、浅く見えて、すはやく、こゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかと、凄じかり。道の右は山を削りて長壁となし、谷幽に、蘚碧たして、幾條ともなく白糸を亂しかけたる細瀧、小瀧の珊々として、灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見捨てがたし。
白羽坂を躓えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を踏みて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全逕にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば、十二勝十六名所、七不思議、一々探り得べくもあらず。
そもく、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深



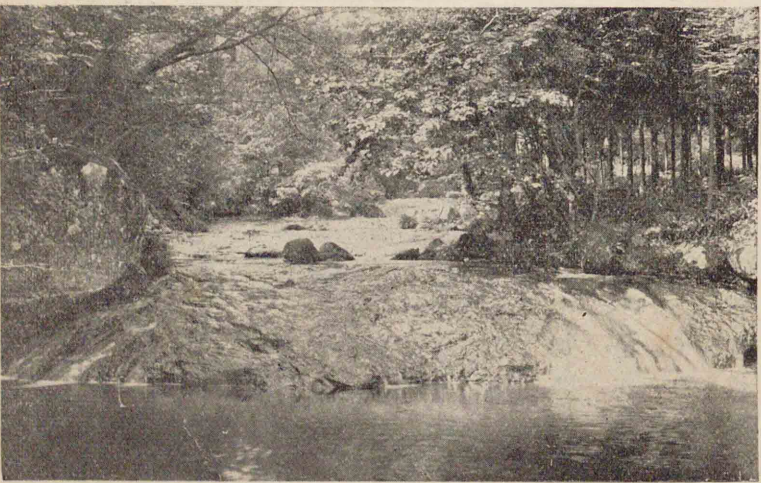
む望を洞雲白てて隔を川箒

片々みかケ

山魚止瀑兒が淵左鞞の嶮は古りて、白雲洞は朗に、布瀑龍が鼻材木
 岩五色岩船岩など眺め行けば、鳥居戸前山の翠衣に染みて、福渡戸
 の里に入るなり。
 途すがら前面の崖のところ／＼に咲残りたる躑躅・山藤など打
 眺めつゝ、行くほどに、鹽釜の湯・甘湯澤・小太郎が淵など早くも過ぎ

く西北に入り、綿々として、箒川の流に浜る
 片岨にして、到るところ
 ろ、巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の
 薬研に瑠璃末を砕くに似たり。まづ大網
 の湯を過ぐれば、根本

て、いつしか畑下戸の里に着きぬ。
 一村十二戸、温泉は五個所に湧きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる瀆に臨めり。俯すれば水石の齟々たるを見、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落來る流は、二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたるごとき吉井瀑となり、東北は山また山を重ねて、浪牙の玉簾深く、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、ま



淵が耶小

たあるまじき別境なり。

我はこの繪を見る如き清穩なる風景に逢ひて、かの途上、嶮しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛び肉消えて理むる方もなく搔



尾崎紅葉自畫像

しといふも、水の逝くに過ぎざるのみ、牢として抜くべからざる我が半生の痼疾は、いかでか壤と水との醫すべきものならん」と齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、まづ侮らるべき愚の者なれや。見

亂されし胸の中は、藹然として頓に和らぎ、恍然として凡べて忘れたり。誠によくこそ我は來つ

ふも、壤の堆きのみ、川の暢運かりし、山の麗しとい

よ、見よ、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、時つ巖も、吹きくる風も、日の光も、雞の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲みを忘れ、苦みを忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、今より斯くの如くにして我が生を終へんかな。(紅葉全集)

自修文

四 同胞兄弟

僧正は僧侶の中でごく高い身分である。當時、此の國の官制では、陸軍大將のすぐの次に位する格式となつて居る。今旅人が戸を開けて入つた此の家の主人は其の僧正なのだ。十年前に此の地の寺領を預つて以來、ミリイ先生と云ふ名が殆ど慈善の神様のやうに思はれて居る。齡は本年七十五歳、家族としては、自分よ

此の國フランスを指す

レミゼラブル

ユーゴー
Hugo 本課の
原作者 佛國
の詩人 劇作
家 小説家 (Les
Fugues)

フラン
一フランは我
國の約三十
九錢



りは十歳ほど年下の妹と一人の老女だけである。始めて此の土地に赴任して来た時、すぐに貧民病院を見廻り、其の建物の狭くむさくるしいのを見て、廣い立派な自分の官宅と取換へた。何も只三人の家族に廣い住居はいらぬから、それよりは、大勢の貧しい病者にゆとりを與へるが、いゝとの意見に出たのだ。此の一事によつても、大方其の人柄は察しられる。年々政府から受ける俸給が

一万五千フラン、其の内一万四千フランまでを悉く慈善事業に寄附し、自分は單に一千フランと妹の身に附いた所得五百フランで、極めて質素に暮らして居る。是では餘りひどいからといふ老女の苦情で、別に地方政廳から馬車代として年三千フランを受ける

由緒
いはれ

發心
菩提心をおこす

ことになつたが、此の三千フランもすぐに他の慈善事業に一切寄附することを取極めた。是からと云ふものは、土地の人が其の徳に感じて、凡べて恵み金の類をば此の僧正の手に託するやうになつた。是がため年々僧正の手を經る金額は實に夥しい。けれども、授ける豊かな人よりは、どうしても受ける貧しい人の方が多いから、一錢でも僧正の爲にはならぬ。そればかりでなく、時々分與へるのに不足して、自分の乏しい家計をそれに廻すことがある。およそ人の難儀とあれば、どのやうな危険を冒しても之を救ふ。此の點では慈善家であるばかりでなく、勇者である。けれども、世間一般の宗教家のやうに、決して嚴しい意見は持たぬ。本來由緒のある家に生れ、華美と贅澤の中に育つた人で、たゞ革命の亂の爲に家を失ひ、亂をイタリイタリに避けて居る中、最愛の妻に死なれ、それがため痛く世をはかなみ、發心して宗教に歸したとのことである。

だから、若い時には、普通の俗人と同じやうな行をしたのであらう、多少は過もあつたであらう。それは自分で常に言つて居る。随つて人に説く意見も柔かて、無理がない。先づかうだ、人は誰でも肉體と云ふ重い荷物を背負つて居る。此の荷物が常に欲心や過の基となるから、油斷なく之を見張つて居らねばならぬ。出来るだけ之を抑へつけて、之に克つやうに努め、万々止むを得ないやうになつたら之に従へ。従へば罪となるのだ。けれども、全く止むを得ない場合なら許されよう。轉んで膝を突くのは仕方がないから、すぐに其の突膝で神に縋り、膝からは墮落しないやうにせよ。完全と云ふことは神より外に期せられないから、人はこれを望むべくもない。人はたゞ正直にしなければならぬ。たとひ過つて罪を犯しても、決して正直を忘れるな。一所懸命に罪を少くするやうに勉めるのが人の道だ。全く罪のないのは神ばかりだ。

罪とは肉體に籠つてゐる引力のやうなものだ」と、誠によく人情を噛分けた穩かな意見である。人の服するのも無理はない。

此の夜、僧正は夕方の散歩から歸り、室に閉籠つて書き物をしてゐた。所へ、夜食の用意が出来たと見え、老女が来て、戸棚から銀製のスープ皿を出して行つた。スープ皿が銀製だとは此の平民主義の僧正に不似合だけれども、此は先祖から傳はつてゐる大切な寶物で、僧正には此の銀の皿でス



夕食の應答を受けぬるパンヤルパンヤ

一ツを吸ふのが唯一の贅澤である。皿の數は都合六枚の一組で、其の外に銀の燭臺がある。これも親類から記念として受けたので、いつもストーヴの上の棚に一對揃へて置いてある。客のある時に用ひるのだ。規律の能く立つた家だから、皿が來れば直ちに食事だ。僧正はさうと知つて、書き物を止めて勝手に行く。此處は食堂をも玄關をも兼ねて居る。戸を開けばすぐに往來だ。不都合な建物ではあるけれども、貧民病院を其のまゝ住居に用ひて居るのだから仕方がない。此の時、老女は僧正の妹に向つて、宵に買物に出た時、町で聞いて來た恐しい旅人の話を頻りにして居る。「何でも十九年も長い間懲役にゐた奴だと言ひますから、屹度今夜何處かへ泥棒に入りますよ。町中ではもうみんな怖がつて、戸を閉ぢてゐます。此のお家でも、入口の掛金と戸棚の錠前を拵へなければなりません。銀の皿を盗まれては大變でございます。」

僧正は此の話を聞きながら、卓子に向つて坐した。丁度此の時である、外から旅人が戸を叩いたのは、すぐに僧正の口から「お入りなさい」といふ返辭が出た。僧正はどのやうな場合でも、音なふ者さへあれば、誰彼の差別なく必ず斯う返辭をするのだ。僧正の家には祕密もない、都合もない。難儀する人は救ひ、乞ふ人には與へ自分の住居を自分の家とは思はず、財産に就いても全く自分と云ふことを忘れて居る。返辭に應じて入口の戸は開かれた。開いた人は殆ど決死の心とも云ふべきだ。此處で救はれねば救はれる處はないと云つた體だ。彼は突として入つた。背には囊を負ひ、手には杖を持つて居る。風體の尋常でないのは言ふに及ばず、野卑な、大膽な、疲勞した、そして亂暴らしい顔が突然燈光の前に現れた。此の旅人は其の筋から銘を打たれて居る通り、全く油斷のなら

風體
なりかたち

ぬ奴である、眞に恐るべき人間である。燈光の前に立つた其の顔の凄^{まじ}さ、其の姿の恐しさ、老女も僧正の妹も我知らず逃げようとするが如く立上つた。若し日頃から僧正の感化を受けてゐなかつたら、兩女は必ず同時に叫び聲を發したであらう。唯泰然として静かなのは僧正である、驚きも騒ぎもせぬ。僧正の此の静かさには化せられて、妹はすぐ席に復して僧正の顔を眺め、老女は立つたま棒のやうになつて居る。頓て僧正は來客に向ひ、穩に其の顔を見て何か問はうとした。客は問はれるのを待たず、周章^{あわ}てたやうな高い調子で、御免下さい。私の名はジャンバルジャンと云ひます。私は懲役人です。十九年間、^{Toulon}ツローンの監獄で懲役を勤め、四日前出獄を許されたものです。今日は朝から十二^{League}リーグ歩き、疲れ果てて此の土地に着いたけれども、飯食ふ處も寝る處もありません。行く先々で皆斷られ、仕方なしに此の家の外の石の上に寝

ツローン
佛國南部の
町地中海に
臨み軍港を
有る
リーグ
一リーグに我
が一里八町餘

サンチーム
百サンチーム
で一フランに
なる

てゐたら、教會から出た婦人が、『此の家の戸を叩いて見よ。』と教へてくれました。それだから叩きました。泊めてくれますか、くれませんか。此の家は宿屋ですか、何ですか。錢は斯う見えても持つてゐますよ。十九年の間、牢の中で溜^ためた工錢が百九フランと十五サンチーム、四日の旅で二十サンチーム使つただけです。宿賃は拂ひますが、泊めてくれるのですか、くれぬのですか。此の返辭が何より先に聞きたいのだ。又も失望するのが厭^{いや}だから、彼は第一着に自分の履歴をさらけ出した。僧正は人を斷つたことがない。返辭しないで解つて居る。すぐに老女に向つて、例の通り靜に、『さあ、皿を出しておくれ。』といった。此の者の爲にもう膳立を命ずるのだ。彼に取つては實に意外だ。何も問返さず、すぐに膳立とは何かの間違ではあるまいか。彼はつか／＼と又一入^{ひとしほ}燈光近くに進んで、忽然と踏止まり、『お待ちなさい、お待ちな

唯々として
しこまつて

合點
承知

さい。今私の言つたことが解りましたか。私は懲役人ですよ、罪人ですよ、牢から出されたばかりですよ。僧正は又老女に向ひ、新しい敷布を出して、寢床の用意もしておくれ。僧正の言付には一言もなく老女は従ふのだ。唯々として次の室に去つた。僧正は始めてジャンバルジャンに向ひ、さあ、あなた、こゝへ坐つておあたりなさい。丁度私共も是から食事を始める所ですから、御一緒に致しませう。何と云ふ丁寧な言葉だらう。而もそれはわざとでなく、自然である。ジャンバルジャンは始めて泊めてくれることと合點がいつた。けれども、あなた、あ、あなたなどと呼ばれるのは今まで覚えのないことだ。泊ることの出来たのは無論嬉しく感じるけれども、どうも此の待遇が怪しい、合點が行かぬ、殆ど恐しいぐらゐだ。彼は暫しが程は口も利けなかつた。何か言はうとしたけれども、吃つて語をなさぬ。



銀の燭臺を取つてジャンバルジャンの内案をのり正

其の内に、老女は銀の皿を出して来た。ジャンバルジャンは席に着いた。僧正は老女に向ひ、何か燈光が暗いやうだ。と言つた。是は銀の燭臺を持つて来いと云ふ心だらう。老女がさう心得て去らうとすると、皿も是では足りないだらう。と言足した。六枚を残らず出せとの謎である。此のやうに盛徳限りない高僧でも、子供のやうな稚氣がある。尤も子供のやうな心だから、自然に其の徳が高くなるのであらうけれど

も皿と燭臺を客に見せるのを日頃から一方ならず歡ばしく感じる様子である。デャンバルデャンは既に「あなた」と呼ばれて異様に心がとろけてゐる上に、斯様な扱ひを受け、嬉しさと怪しさがいつ終るか果が解らぬ。「牧師さん、いや牧師さんかたぐの坊さんか知らないが、まあ牧師さんと言つて置かう。牧師さん、貴方は世間の人のやうに私を追拂ひもせず、銀の皿や銀の燭臺を出してお客扱にして下さつて、私はもう何も貴方には隠しませんよ。」と、身の上話でも始めさうである。僧正は遮るやうに、「なに、何も私に話すには及びません。此の家は私の家てなく、私が此の家の主人てないのですから。」え、。「此の家は誰でも難儀をする人の家です。行暮れて悩む人が此の家の主人です。」此の言葉が若し心の底に浸込まねば人てない、いや鬼てさへもない。デャンバルデャンは殆ど呆れた體である。僧正は更に語を繼いで、「あなたの名前も聞か

黒岩 著名は周六、
知縣社人、
朝報社長、
五十九年大高

山宮 允
山形市の人、
明治二十三年
學生、
第六高等
學校教授

ぬ内から解つてゐます。「え、聞かぬ内から。」はい、我々の同胞兄弟と云ふのです。あ、此の者を同胞兄弟、眞に僧正の心は人の心でなく神の心だ。(黒岩涙香譯、噫無情)

五 泉

山宮 允

水 芳ばしい森の中から
滾々と湧出る泉

若さに輝き力よ充ち

今華やかな嘴を

沸騰り溢れさせてゐるその美しさ

泉の嘴の色はうつく

その泉 爽かな響を
淡紅色の朝の空に顔はせつ、

歡喜よ不安の岩を征服し
 愛よ流通の路を拓き
 躍り流れる光に勝利よ

（現代詩人選集）

躍り進め 若さの泉 力の泉
 たゞ恃め 汝が生命を歡喜を愛を
 愛と歡喜は勝利と光に導く
 お、芳ばしい森の中から
 今滾々と湧出る泉

六 草雲雀

其の籠は正しく高さが二寸で幅が一寸五分。
 の小さな木戸は、自分の小指の先がやつとのこと入るぐらゐであ

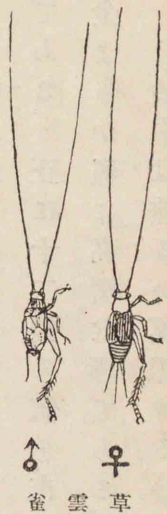
小泉八雲
 本名はラフカ
 ゲオ、ハーン
 (Lafadio He-
 en) 我が國
 に歸化した英
 國人、文學者、
 東京帝國大學
 講師、明治三
 十七年、五月
 五十七年、三
 年

小泉八雲

要の上で開く其

る。だが、彼には、此の籠の中に十分の場所が、——歩んだり跳ねたり飛んだりする場所があるのである。といふのは、彼を瞥見する爲には、此の紗張りの横面を透かして非常に注意して見なければならぬ程に、彼の身體は小さいからである。自分は其の居場處を見付けるまでには、十分明るい處で、いつも其の籠を幾度も廻して見なければならぬ。すると、大抵上の片隅に、——紗張りの天井に身を逆様につらまつて、——じつとして居るのが解る。

自分の身體よりも遙に長い、そして、日に透かして見なければ見分けられぬ程に細い一對の觸角を具へた、尋常の蚊の大きさぐらゐの蟋蟀を想つて見給へ。彼の日本名はクサヒバリ、即ち草雲雀である。正に十二錢の値を市場で持つて居る。自分の重さの黄金よりか遙に高價な譯である。蚊のやうな斯んな物が十二錢。日の中は睡るか瞑想するかしてゐて、毎朝その籠へ差入れて貰



ふ茄子か胡瓜かの薄い片を喰べ
て居る間だけ身動きする……綺
麗にして飼ひ、十分に食物を與へ
てやるのは少々面倒だ。其の身

體を諸君が見るなら、こんな馬鹿らしいほど小さな動物の爲に、少
しても骨を折るなんか馬鹿々々しいと思ふであらう。
けれども、日が暮れると、いつも彼の無限（おぼろげな）な靈が目覺める。日
が暮れると、言ふに言はれぬ美しい巧妙（しんがく）な音樂で、非常
に小さな電鈴の音のやうな微かなく、白銀（しろがね）なすり、ンと震
ふ聲音で、――部屋が一杯になりだす。闇（くら）が深くなるに連れて、其
の音は一層美はしくなり、――時には家中が魑魅（しんがく）の（おんが）小歌の反響に
震動するかと思ふばかりに高まり、――時には極微の糸のやうな
微かな聲音に細まる。が、高からうが低からうが、耳を貫くやうな

不可思議な音色を續ける……夜もすがら此の微塵はそんな風に
歌つて、寺の鐘が明けの時刻を告げる時、やつと鳴き止める。

昨夜、十一月二十九日、机に向つて居ると、妙な感じ、――部屋が空
虚なやうな感じが自分を襲つた。すると、自分の草雲雀がいつも
と異なつて黙つて居ることに氣がついた。無言な其の籠に行つ
て見たら、彼は干からびた茄子の薄片の横で、小石のやうに灰色に
堅くなつて死んでゐた。確に三四日の間食べ物を貰はなかつた
のである。だが、つい其の死ぬ前の晩、彼は驚くばかり歌つてゐた
のであつた。――だから、愚かにも自分は、彼はいつもならず満足し
て居るものと思つてゐた。自分の家の書生は一週間の休暇を取
つて田舎へ行つたので、草雲雀の世話をする務は下女に委ねられ
たのである。同情深い女でない下女は、其の小さな虫のことを忘
れたのではないが、もう茄子が無かつたのだと言ふ。そして、其の

代りに葱か胡瓜の薄片を與へることを考へなかつたのである。……自分は下女を叱つた。彼女は恭しく後悔の意を表した。……だが、仙郷の音楽は止まつて了つた。寂寞が自分の心を責める。部屋は暖爐があるにも拘らず冷たい。馬鹿な！……麥粒の大きさの半分もない虫の爲に、善良な少女たる下女を自分は不幸にしたのだ！あの無限小な生の消滅がこんなにもあらうと信じ得られなかつた程に、自分の心を悩ませる。併し、一小動物でも、……蟋蟀一匹でも、……其の欲求を思ひ遣つてやるといふ習慣が、知らず識らず次第に世話心といつたもの、……關係が絶えてから始めて氣のつく一種の愛着心、……を生んだのかも知れぬ。其の上又、其の夜がひつそりしてゐたので、其の微妙な聲の妙味、……籠の中なる微塵の靈と、余が體內なる微塵の靈とは、實在の大海にあつて永遠に同一物であるぞと語る、……を特に身に沁みて感じたのか

大谷繞石
名は正信、
江市の人、
治八年生、
文學者、
高等學校教授

野口米次郎
愛知縣の人、
明治八年生、
英文學者、
大學教授

も知れぬ。それは兎もあれ、彼の最後は實に慘憺たるものであつた。日々夜々食に飢ゑ水に渴した彼は、最後に自分で自分の脚を噛んで居つた。如何に雄々しく歌ひ續けて居つたことかよ！……神よ、自分等凡べてを、……殊に下女を、……赦し給へ！
だが、飢餓の爲に自分で自分の脚を噛むといふことは、歌の天稟を有する者の逢着する最上の凶事ではない。世には歌はうが爲に自分で自分の心臓を食はねばならぬ人間の蟋蟀があるではないか。(大谷繞石譯虫の文學に據る)

七 霧のロンドン

野口米次郎

僕がパリを辭し、オステンドからドーヴァー海峡を渡つて、鐵路ロンドンに着いたのは、冬に入つた十二月の某日だつた。十年目で再び見るロンドンの霧！僕の心はどんなに不安と喜悅で震

ライオネル、
ジョンソン
英國の詩人
(1796-1865)

ネルソン
英國の水師提
督 (1758-1805)

ハムレット
シェークスピア
の戯曲
「ハムレット」
の主人公

へただらう！ その時の滯英日記にかう書いてある。

「漂流した材木の一断片のやうに、僕はロンドンの中へ投出された。耳を劈く大都會の聲！ これは、ライオネル、ジョンソンが歌つたやうに、『或者是高慢な、又或者是憚ましい呼吸をしながら、死へと急ぐ進軍の聲。』である。ロンドンは果して僕に對して笑ふだらうか、將又濫面を作るだらうか。見よ、ロンドンは一面に霧の灰色で包まれて、寧ろ非現實的な外觀を呈して居るではないか。 Trinity Square Nelson Hamlet 海上に立つて居るやうに見える。否、深い霧のために靈となつて天空に消えるかとも思はれる。僕は幽靈を見たハムレットのやうに、おづ／＼しながらスクエアーへ接近すると、背の高い瘦せた女に呼掛けられた。『サフレジエト一部買つて下さい！』僕は心の中で、あゝこれが音に名高い婦人參政權運動者だたと

トムソン
英國の詩人、
第二のトムソ
ンと呼ばれた
(1766-1842)

思ひながら行過ぎた。
このトラファルガー、
スクエアーを、或人は、
『歐羅巴』
『ヨーロッパ第一の勝
地だ。』といひ、また或人
は、『土瀝青』
『アスファルト』の無
趣味な荒地だ。』といふ。
僕はすたこら今夜眠
る旅館を求めべく急いだ。
文章の初から引用が多くて聊か恐縮するが、僕が十年目に再び
見たロンドンThomsonは、トムソンが歌つたやうに、『恐しい夜の都會自身、
霧のロンドンであつたのである。』
僕はピカデリー附近の一旅館に落着いた。けれども、久しぶり



ア-エクス、-ガルフラト

でロンドンに來たことであるから、容易に眠られぬ。再び着物を着替へて、霧の夜景を眺めに旅館を飛出して、平安ならぬロンドンの坦々たる大道路ピカデリーを下つた。暫時歩いて、左手にあるグリーン・パークに踏込んで、其處に据ゑてある椅子に腰掛けた。靴の下でがさ／＼音がするので、電燈の光でよく見ると、冬であるのに青々とした芝生！ 少



ピカデリー、サーカス

少古風な修辭だが、僕は「冬なほ青い草のやうに永久に年若い新鮮なロンドン」を祝福した。歸路に就いたのは十二時近くだった。ピカデリー、サーカスの方からリゼント街を見渡した光

Regent

Piccadilly Circus

Green Park

景は、實にヨーロッパに於ける最も壯大な觀物の一である。殊に霧の夜、人の往來も少くなつた時刻に見れば、その偉觀が一層水際立つて浮いて見えるのを感じる。

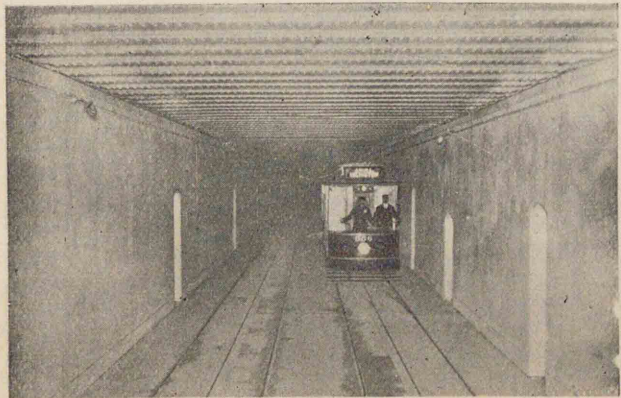
ロンドン到着後一週間ばかりは、毎日朝から「霧のロンドン」だった。その頃、僕がウエストミンスター、ガゼット Westminster Gazette に寄稿した小品文の中に、次のやうな文章がある。しつこくしつこく

「僕は或朝モニュメント停車場を出て、ビショップス・ゲートを指して歩いた。ぼて／＼として、魚か何かのやうに泳いででも居るのではないかと疑はれるやう



リゼント街

な霧が、狭い道路を流れて居る。頭を擧げると兩側の高い建築物が耳語でもして居るかのやうに雙方から肩を接近させて居る。そして、その霧の中を金に餓ゑた魑魅魍魎が走つて居る！これは冬のロンドンで最も特徴のある光景の一である。それから更に僕を動かした一光景を語りたい。或友人に晚餐に招かれて、夜遅くランカスター、ゲート停車場で地下鐵道の列車を待つてゐた。地下幾十呎の穴の中、而も夜が更けて居るから、乗客は一人も居らぬ。僕はこの時、まだ感じたことのない、不思議な、皮膚をみし／＼と噛むやうな



地下鐵道

沈黙に觸れた。この沈黙は自然の産んだ沈黙でなく、近代の科學の産んだ不自然な沈黙である。若し出る穴が突然塞がれば、どうしたらよいかと思つて戰慄した。此處はきつと地獄へ近いだらうとも思つた。『深夜の地下鐵道の沈黙』——これは近代の新詩人が歌ふべき好題目だ。



野口米次郎

ロンドンの冬に霧がなかつたら、ロンドンの建築物はどんなにその美觀を減するだらう。僕が滞在してゐた旅館の附近には、國民美術館があり、また僕がロンドンの寺院中で一番好きなセント、マーチンズ、イン、ザ、フィールドがある。この小寺院は建築上から論じててもロンドンきつての建築物として尊重すべきものである。それが霧に包まれた場合は、眞に夢のや

サッカレー
英國の小説家
(1811-1862)
George Eliot



レカッサ

うな非現實的な麗しい趣を添へる。大英博物館なども等しく多大に冬の霧の恩恵を受けて居る。霧があればこそその建築に薄黒い滋味シケルコトが付き、霧を通じて見ればこそそれが如何にも莊嚴で又氣高い印象を與へるのである。僕は「冬の霧の大英博物館を訪うて、思ひも寄らぬ稀觀まれに見えぬの光景に接する機會を得た。僕がその圖書室に入つた時、不圖英國人と生れて此等の書物に手を觸れ、且その中に含まれてゐる眞理を味ふことが出来ることに對し、心からの祈禱を捧げたい。」といつたサッカレーを思ひ出した。今僕は諸文豪の名前の刻してある圓天井へと階段を登つて居る。かういふ高い場所からずつと下の讀書室を眺めおろした光景——霧の冬のことであるから、時間は午後四時前後で

野口米次郎自署

霧の冬

あるのにも係らず、幾百といふ青黒い笠を冠つた電燈が點いてゐて、それが机の上へ丁度小さい水溜のやうな影を落して居る。それは實に美觀であつた。頭を擧げると、世界に二つとない巨大な圓天井が沈黙を包んで居る。僕はこの時この驚異すべき莊嚴と雄麗とに打たれて、一時知覺を失つたといつても決して誇張ではないと思ふ。併し、時が霧の冬でなければ、僕の感じはかうまで嚴肅莊重なものではなかつたに相違ない。僕は霧の冬のロンドンの光景を詳細に見たことを心から感謝する。(霧の倫敦)

自修文

八 性格描寫

一 我が母

母は神経質であつた。また我々に對して厳きびしかつた。しかし、厳しさと恐しさとは違ふ。愛は凡べてのものより強い。母の膝に抱かれる時、我々は何もかも忘れてしまつたものである。母は我々を教育するために家族を擧げて東京に移つた。わざわざ東京に移つたほどであるから、我々は勉強しなければならなかつた。復習は毎日の日課であつた。我々が勉強する時には、母の面は輝いて見えた。これに反して、我々が勉強しない時には、母の機嫌は悪かつた。勉強は我々にとつて樂たのしみではなかつた。だから、我々はなるべく勉強を避けようとした。東京に移つた母の目的を解することは、當時の我々には出来なかつた。で、或時、私がもう勉強は濟なみました」といつて、遊びに出ようとした時、勉強するのにもうお仕舞といふことはない」と、母の言葉は厳しかつた。

母はまた一寸したことにも非常に注意することがあつた。或日、私は草履の緒を切らした友達を宅に連れて来て、緒を立てるのを手傳つてやつた。私はこれについて別に何とも思つてゐなかつたけれども、友達が歸つてから、母は私を呼んで、人の履物はきものを扱ふものではありません」といつた。もとより母も親切が美德であることは十分承知してゐるのであつたが、しかし、自分の子が人の履物を扱ふのが情なく見えたのであらう。令嬢の履物を揃へさせられたため憤慨してその家を飛出した書生が、後日偉えい人物になつた話を、この時母は私にして聞かせた。

母の死ぬ少し前に、「行かう」といふ言葉がその唇から洩れた。いろいろの苦勞と病氣が母をさいなんさいなんで、死を思はせたのであらう。しかし、子供の私にはその意味が分らなかつた。で、私は「何處どこに」と不審げに聞いた。母は起き直つて私を抱上げ、そして、熱い頬ほ摺すりを

さいなんむ
せめる、苦し
める

しながら、「何處にも行きはしないよ。」といった。
 書くべき事柄はまだあるに相違ない。しかし、母は私の十歳の
 時に死んだ。これ以上思ひ出せない。
 裏の山に母の墓がある。私は休暇で歸る毎に必ずお参りする。
 墓は風雨に古びてしまつてゐる。(山名生)

二 我が兄

俺を本當に理解してくれる者は、此の廣い世の中に俺の兄唯一
 人である。——俺は兄に就いて何か言ふに當つて、先づ此の言葉を
 述べたい。

俺を理解してくれる唯一人の兄、彼は五尺の體軀、渾身熱情に燃
 えて居る火のやうな性格の持主である。一步の餘裕もなく、一分
 の隙もない。唯理想と向上の念に燃えて、自ら號して「曙光」といふ。

渾身
全身

精悍
けししい
するどくてた

挽回
とりかへすこ

零細
わづい

大様な坊ちやんとして育て上げられた彼は、彼の少年時代、一家
 の没落この方、急に一變して、精悍な氣、向上の念、あらゆる苦痛に儼
 然として堪へることの出来る人となつたのである。逆境に在つ
 て冷たい浮世と闘ひ、其の苦痛の經驗を嘗めて、彼の性格はいよいよ
 變化を加へて來た。彼は中學にも行かなかつた。家を思ひ身
 を思つて、じつと唇を噛みしめて、「行きたい。」とは一言も洩らさず、黙
 つて彼の友の制服姿を見詰めてゐた。彼は一切を舉げて父を援
 けて、家運の挽回に努力して來た。

青年時代の彼はやはり人の子であつた。彼にも種々の煩悶は
 あつた。煩悶の結果、キリストを知り、釋迦を知つた、國を知り、身を
 知つた。さうして、又俺を知つてくれた。彼は零細な時間を利用
 して、色々なことを學んだ。ゆつくり落着いて勉強する時間を持
 たなかつた彼の知識は、或は新聞知識かも知れない。彼の友は彼

を評して言ふ、鋭い先見の明と深い人間味とに富んだ、さうして、冷たい理性と、一般的の知識を豊富に有する受難者の一人だ」と。受難者、——或はさうかも知れない。彼は自分を犠牲にして一家を背負つて闘つて來た。甘んじて苦しい自分の運命を開拓して來た。同情心が深く、責任感が強く、人を信ずるに餘り度を過ぎるやうな點は母に似て居る。正義と意氣を愛する點は父に似て居る。彼は屈するといふことを知らない父と、我儘な俺との間に立つて、いつも父と俺の衝突を調停し、俺の愛兄として俺を愛撫してくれただ。また俺の爲に泣いてくれた。斷乎たる父の反對の下に、優しくも俺を庇つてくれて、俺を中學といふ新しい生活に入らせてくれたのも彼だ。二年前の秋、或薄ら寒い夕方、小さな行李を手にして、飄然として五市へ向つて出發する俺を停車場に見送つて、固く俺の手を握つて、万事は俺が引受けた。しつかり遣つてくれ。お

飄然
ふらり

士は云々
士、爲、知、己、
者、死、(史記)
骨肉相食む
血を分けた親
しい間柄の者
ひあふ

前の新しい門出を心から喜ぶよ。」と言つて、俺を心から慰めてくれた彼の姿を、俺は今でもはつきり覚えて居る。乏しい自分の小遣の内から、不足ながらも毎月俺の學資を與へてくれるのも此の兄だ。俺は此の兄に對して、感謝の涙を拂はずには居られない。辛いこと悲しいことが俺を襲つて來る時、俺はいつも此の兄を思ひ浮べて、自ら慰め自ら勵まして行く。俺に取つては、此の兄は唯一の保護者であり、唯一の愛人であるのだ。「士は己を知る者の爲に死す。」といふが、俺は俺を知つてゐてくれる此の兄の爲に凡べてを舉げて盡したい。世には骨肉相食む者もあるのに、兄は俺の爲に身を犠牲にしても俺を援けてくれる。俺は此の兄を持つて居るといふだけでも幸福だ。

俺は斷片的にこんなことを述べたが、いくら述べたつて、到底彼の半面をも傳へることは出來ない。俺の眼に映ずる彼は、俺の平

凡な筆で表し得られる程度に薄つべらなものではない。事實彼は人々の眼には詰らないやうに見えるかも知れないが、俺には能く解る。彼は天と共に歩み、天と共に仕事をして居るのだ。彼には不平がない、不満がない。彼は唯一筋の理想への路を走つて居るのだ。

俺は徒に筆を弄して彼の人格を傷つけるのを恐れる。俺はただ彼の健康と幸福とを祈つて筆を擱く。(檀生)

弄す
してあそぶ

三 自己

今日學校からの歸りにまた下駄の緒が切れた。やつぱり俺の間に合せ主義はいけないと思つた。それはつい昨日たて直したばかりのものだった。それが有合せの細い紐だったので、一日ともたなかつたのだ。もつとしつかりした物でたてたら、またたて

直す手数は省けたらうに。俺と一緒にゐる人は、誰でも俺は徹底的に物事のやれぬ男だと氣づくだらう。中學時代に、Mといふ男と同室にゐた。彼はその性質が俺と反對だった。數學の試験の前夜など、むづかしい問題になると、俺は得意の諳記で間に合したが、彼は解らぬと教科書の第一頁から繰返して、どんなに晩くならうとも、解るまではやつた。翌日の試験に應用問題が出ると、彼はよくやつたが、俺は勿論駄目だった。

昨年の學期初に、俺は教科書の古手を買つた。後で新しい本と引較べたら、少々違つた所があつた。同じく古本を買つた連中には、それを本屋に戻しに行つたものもあつたと聞いた。しかし、俺にはそれが出来なかつた。なに、たゞ譯をいつて拂つた代價を受取つて来るだけではないかと思つても、俺にはどうしてもそれが出来なかつた。相當の理由があるではないかと獨りて思つて見

ても、やつぱり行けなかつた。不便を感じながらも、とう／＼一年間その本で我慢した。俺も随分面の皮の薄い人間だ。子供の頃から、よく父や姉達にいはれた。「そんなに面の皮が薄くては、人前で演説なんかとてもやれぬ」と。その後幾星霜、烈日に照らされ、風雨に曝さらされても、俺の面の皮はまだ人並に厚くならぬらしい。

北條時宗が元使を斬つた果斷の行爲は、小學時代から度々教はつた。しかし、俺にはまだその眞似も出来ぬ。俺は外出して度々引返すことがある。家を出る前に「あつちか」「こつちか」と随分考へる。しぶ／＼ながら「あつちに」と決めて行きかける。「あつちへ向つて歩きながら、頭の中は「こつちへ向いてゐる。「あつち」と「こつち」の暗闘で、「こつち」が勝てば後戻りとなる。これは誰でもあることだらうが、俺には「こつち」の勝つ場合が殊に多い。店でコップを買ふ。氣に入つたのを二つ見出す。二つのコップが兩方cupからしが

北條時宗
の執權
第六代

みつゝ。店員が待遠さうに立つてゐるので、涙を振つて一方を振り離して他方を携へて歸る。買ったコップが壊れるまでは、あの飽かぬ別をしたコップの姿が目先にちらつく。

一昨年一緒にゐた男にKといふのがあつた。俺とよく意氣が投合した。彼は體操はいつも丙丙だつた。俺も同じだつた。何しろ小學校から高等學校まで十四年間の學校生活に、まだ一度も運動會の賞品を貰つたことのない男だつた。俺は彼より三年少い十一年間に二度もあるのだと、彼に對してだけは、俺も天晴あつぱスポーツマン風を吹かした。しかし、その二度が「二人三脚」と來てゐる。しかも三等の際きはどい所だつた。とにかく二人とも少々鈍い方だつた。彼はいつた。「俺達のやうな人間には歌は詠めぬ。詩も作れぬ。競争なんか眞平だ」と。俺には友達が少い。人と話すことも少い。小學校に入學した

當時、俺があまり黙りこんで毎日じつとしてゐるので、先生の方では若しか病氣でもありはしないかと心配したさうだ。それは始めて他人の中に入つたためでもあつたらうが、とにかく俺は他の兒童に較べると、おとなし過ぎたのだつた。中學時代にも互にふざけて談笑するのは、小學時代からの同郷のSぐらゐなものだつた。高等學校に入ると、殆ど友達と名のつくほどのものはなくなつた。それでも、そんなに淋しくは感じない。中學の寄宿舎にゐた時、上級生から、「お前はおとなしさにしてゐるが、實は陰險な奴だ。」といつて、制裁されたことがあつた。

俺は今何かしつかりした主義を擱みたい。俺にはまだ何等の主義も主張もない。あまりに一の主義に凝り固まるのは不自然かも知れぬが、しかし、主義によつて行動する人の行爲は、傍から見ても氣持がよい。凡べてが徹底してゐる。他人に對しても押が

強い。その決斷は鋭利な剃刀のやうだ。

人の性質はその境遇に支配されることが多い。俺は六歳の頃まで婆やの背中で育てられた。兄弟は多かつたが、上に姉が二人あつて、幼時の遊相手は大抵女ばかりだつた。「まゝごと」の作法は習つたが、竹馬の乗り方は教はらなかつた。遊ぶ所は大抵屋敷の中。他所へ出る時には必ず婆やに負はれた。俺に體操が苦手だつたのも、陰險な奴だといつて制裁されたのも、全く俺ばかりのせゐでもあるまい。

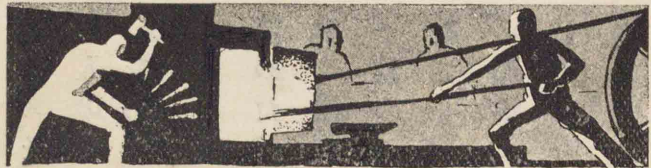
漫畫はよくその特徴を捕へて素描した所にその趣がある。そして、その特徴たるや、あまり都合のよい、有難いものではない。寺内伯爵の「ピリケン」、清浦子爵の「ウマ」、高橋前子爵の「ダルマ」等、等、等、自分も自己を見つめて、やつとこれだけのスケッチが出来た。その特徴のあまり有難くない點から見て、これも一種の自分の漫畫

素描
大體の形狀を
うつす
寺内伯爵
名は正毅
清浦子爵
名は奎吾
高橋前子爵
名は是清

白樺派

千家元磨
島根縣の人
明治二十一年
生 詩人

だらう。(井手生)



九 友よ

千家元磨

友よ、

君の全精力を仕事に集注せよ。

どうして一大飛躍の出来ぬ筈があらう。

友よ、

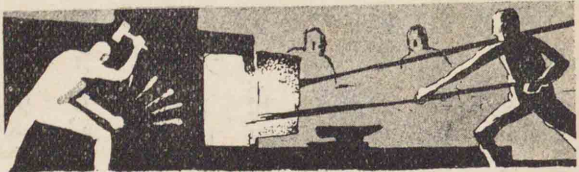
お互に此の暗い工場で心と腕とを鍛へよう。

假令暗黒が我等を虐げ、

我等の靈性を傷つけ、

光を奪ひて、

我等を絶望の淵に投込むとも。



一〇 己が影

今は昔、國司の郎等の、人に猛く見えんと思へる者ありけり。 暁

友よ、
若き血は我等の胸に高鳴り、
いとも確實に抱いた理想の夢は、
必ず輝く未來の國に實現される筈だ。

友よ、

如何に傷つき仆るとも、

我等は生命の焰の燃ゆるかぎり、

望の旗を高く掲げて只管に進まう。(炎天)

に家を出でて物に行かんとしけるに、妻起きて食物のことなどせんとするに、有明の月の板間より屋の内に差入りたるに、己が影の映りたりけるを見て、髪打亂したる大きな童盗人の物取らんとて入りけるぞと思ひければ、あわて迷ひて、夫の臥したる許に逃行きて、夫の耳にさしあてて、竊に「かしこに大きな童盗人の髪打亂したるが、物取らんとて入立てるぞ」といふ。

夫「そはいみじきことかな」とて、枕上に太刀を置きたるを探り取りて、其奴のしや頸打落さん」といひて起きて、裸なるものの髻放ちたるまゝにて、太刀を持ち出て見るに、またその己が影の映りけるを見て、「こはいかに。童にはあらで、太刀抜きたるものにこそありけれ。己が頭も打破られなん」とおぼえければ、いと高くはなきて、「おう」と叫びて、妻のある處に歸り入りて、妻に、「御身は心ある兵の妻とこそ思ひつるに、いみじく拙き物の見やうかな。いづれか

物のみせやうなれんへんはまづいづれか

童盗人なりける。髻放ちたる男の太刀を抜きて持ちたるにこそありけれ。いみじき臆病のものよ。我が出てたりつるを見て、持ちつる太刀をも落さんばかりこそ震ひつれ」といふは、我が震ひつる影の映りたるを見ていふなるべし。

さて、妻に「かれ行きて追出せ。我を見て震ひつるは、怖しと思ひつるにこそ。我は物に行かんとする門出なれば、いさゝかなる疵も打ちつけられんは由なし。女をばよも斬らじ」といひて、衣を引被きて臥しにければ、妻「言甲斐なの人や、かくても弓箭を捧げて曉の道をば行かんとやする」といひて、また見んとて立出でたるに、傍にありける紙障子の不意に夫に倒れかゝりければ、夫はありつる盗人の襲ひかゝりたるなりと心得て、聲をあげて叫ぶに、妻憎くをかしく思ひて、やかの盗人は早う出でて去にけり。その上には障子の倒れかゝりたるぞ」といふ。

その時に、夫起き上りて見るに、げに盗人もなければ、障子のそぶ
ろに倒れかゝりたりけるなりと思ひ得て、裸なる脇を搔き、手を舐
りて、其奴はげには我が許に入來て、いかでたやすく物を取り得ん。
盗人の奴障子を踏みかけて去にけり。今暫しあらんには、必ず搦
め取るべかりしを、御身の拙くてこの盗人をば逃しつるぞ。といひ
ければ妻言葉もなく笑ひて止みにけり。(今昔物語に據る)

扇の的

さるほどに、阿波讃岐に、平家に背きて源氏を待ちけるつはもの
ども、あそこの嶺この洞より、十四五騎二十騎打連れ、馳來る
ほどに、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ勝負
を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋常に飾つたる
小舟一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、

平家物語
壽永四年二月
檣の浦
屋島の戦

灌頂卷

信濃朝司行長

大抵は同色

舟を横ざまになす。あれは如何にと見る所に、舟の中より年のよ
はひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆
ぐれなるの扇の日出だしたるを舟のせがいに挟み立て、陸へ向ひ
てぞ招きける。手足

判官、後藤兵衛實基を召して、あれは如何に。と宣へば、射よとにこ
そ候らめ。たゞし、大將軍の矢おもてに進んでけいせいを御覽せ
られん所を、てだれに狙うて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さ
りながら、扇をば射させらるべしと申しければ、判官、御
方に射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、てだれども多う候なか
に、下野國の住人那須の太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵には候
へども手は利いて候。と申す。判官、證據は如何に。と宣へば、さん候
かけ鳥などを争うて、三つに二つは心ず射落し候。と申しければ、判
官、さらば與一呼べ。とて召されけり。

扇の的

五

十一卷田の子

高、おとせ、おとせ、おとせ

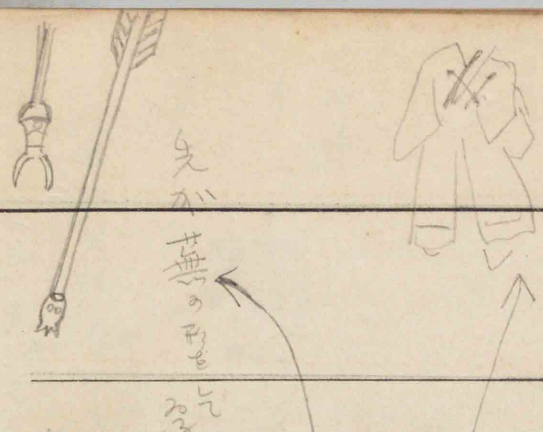
緒通



端袖

搗濃型色 否

社あぐみ



與一その頃は未だ二十ばかりの男
 なり。襦にあかぢの錦をもつて、おほ
 くびはたそていろへたる直垂に、萌黄
 緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二
 十四さいたる切躰の矢負ひ、うすぎり
 ふに鷹の羽割合せて、矧いだりけるぬ
 ための鎬をぞ差添へたる。重籐の弓
 脇に挟み、冑をば脱いて高紐に懸け、判
 官の御前に畏る。判官、いかに、與一、あ
 の扇のまん中射て、かたきに見物させ
 よかし。と宣へば、與一、つかまつとも
 存じ候はず。これを射損ずるものな
 らば、永き御方の御弓矢の疵にて候べ



尾 形 月 三 筆
 し。一定仕らうずる仁に仰せつけら
 るべうもや候らん。と申しければ、判官
 大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國
 に向はんずる者どもは、皆義経が下知
 を背くべからず。それに少しも仔細
 を存ぜん人々は、是よりとう／＼鎌倉
 へ歸らるべし。とぞ宣ひける。與一重
 ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけ
 らん。さ候はば、外れんをば存じ候はず、御
 説て候へば、仕つてこそ見候はめ。とて
 御前を罷立ち、黒き馬の太く逞しきに、
 まるほやすつたる金覆輪の鞍おいて
 乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいく

二初

金色

鞍

手綱

矢

弓

重籐

切躰

二日
荒
神

神社

つて汀へ向ひてぞ歩ませける。
御方の兵ども與一が後を遙に見送つて、此の若者一定仕つたつて存じ候。と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。矢頃少し遠かりければ、海のおもて一段ばかり打入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風烈しくて、磯打つ浪も高かりけり。舟は揺りあげ揺りするて漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す、陸には源氏くつばみを並べて之を見る。いづれも、いづれも晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくは、あの扇のまん中射させてたばせ給へ。これを射損ずるほどならば、弓切折り自害して、人に再びおもてを向くべからず。今一度本國

松平定信
主、城國白河
中、文政府の老
年、七、十二
天徳寺
佐野了伯、豊
慶長、吉の臣、四
四、六年、四十

へ歸さんと思召さば、此の矢外させ給ふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなりにけれ。與一鏑を取つて番へ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふてう、十二、三つぶせ、弓は強し、鏑はうらひ、くほどに長なりして、あやまたず要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一ゆみ二もみ揉まれ、海へさつとぞ散つたりける。皆ぐれなるの扇の日出だしたるが夕日に輝いて、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家ふなばたを叩いて感じたり、くがには源氏儼を叩いてどよめきけり。(平家物語)

一二 天徳寺琵琶を聴く 松平定信

北條の家臣に天徳寺何某といふものあり。毎度武功を顯しし

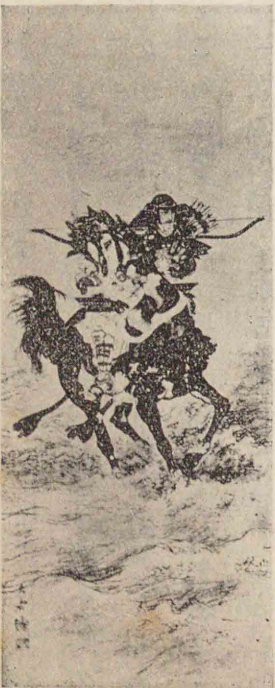


身なり。或日いとまありけるにや、琵琶法師を招きて琵琶を弾かせけるに、その郎等宗徒の者共も皆列し

て之を聴く。折しも、天徳寺法師に向ひて、凡そ喜び樂しむことも興あるものながら、哀れなるは理も切に聞えて、その感もまた深し。願はくは、哀れなるかたを聞きたし。といふ。法師も諾しつゝ、かの那須與一宗高が扇の的を射たりしことを語りければ、その曲も終らざるに、天徳寺雨雫と泣きて、ひたもの紙など出して涙をおしぬぐひけり。その曲終りて後、さても、哀れなることにて、覺えず落涙いたし候。も一つ哀れなることを、と好みければ、今度は佐々木の四郎高綱が宇治川の先陣したりけるを語りけるに、これも前に

同じく落涙數行に及べり。

さて、その平家も終りて、法師も歸りければ、天徳寺郎等の輩に打向ひて、さて、今の平家は哀れなることにて侍りき。汝等は如何聽きしとありしに、郎等皆口を揃へて、面白きことに存じ候。ただ一つ不審に存じ候は、君には哀れなることを二度まで御好みありしに、かの法師は哀れなることをば語り候は、いと勇しき華やかなることを語り候ひき。それに君にはひたもの落涙なされ候は、如何なることにて候にか。さて、合點參らぬことにて候。と申ししかば、天徳寺殊の外驚かれて、今までの汝等をば頼もしきものよと思ひしに、今の一言にては誠に驚き



梶原景季

入りたること、今よりは汝等をも見下し候なり。ひとへに我が家もこれぎりと覺ゆるぞ。よく何れも聞き候へ。源平その時の合戦は、まことに安危存亡の分るゝところにして、志士皆死を極め忠を盡す時なり。然るところに、平家より扇を出して之を射よと好みしに、源氏の武者の中、一人この扇を射る者なくば、まことに他方に笑を残すといふものにして、且又源氏の勢の屈するところなり。それによりて、多くの武者の中に精兵を選ばれて、選び出されしは此の宗高なり。この時辭せんには、軍の供をも省かるべしといふことなれば、志士この大事の軍に中途にして歸りたらんは、如何ばかりか恥辱ならんと思ひきりて、馬を海中へ乗入れたり。折しも波風強くして、平家の舟浮沈上下し、扇も定かに見え分かず。宗高心の中に祈願して射けるに、あやまたず要ぎはを射きり、扇の風に漂ひて波に浮べるは、さながら秋の木の葉の風に隨ふに異ならず。

蒲冠者
源範賴
梶原景季



生 倅 (伊東紅雲筆)

時に源平鳴りを静めてゐたりしが、此のやうを見て、陸にては籬を叩き、海にては舟ばたを叩きて感じ合へる聲暫しの間は絶えざりきと語りたるにはあらずや。この時、與一辭して向はずば、腹切りて死すべし、又扇を射損じなば、同じく腹切りて死すべし。進退谷まるところにして、哀れなることの至極なり。扇の爲に腹切りて笑を後世に残すは、武士の身に取りて恥の上の恥なり。又佐々木四郎が宇治川を渡したるも同じことなり。頼朝公の祕藏して、友愛の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ名馬を、

厚き言葉の上高綱に賜はりしは、これにて宇治川の先陣をせよとの命なり。君命の重き言はん方なきに、重き賜を受けたる身なれば、是非先陣すべし。若し仕損じなばこれまた死（死なう）になんとの心なり。凡そ人は死より外の重きことはなく、悲しきことはなし。今様々に心を勞し利欲に引かるゝも、皆命の惜しきゆゑにあらざる。その命を義（い）によつて輕しとするは、武士の習なれども、武士の道ほど哀れなるものはなし。我も陣に臨みて、堅きをくだき強きをとりひしぐにつけても、陣頭（ちかご）に臨めば、いつも宗高・高綱の心にて出づるゆゑ、平家を聽きし時も、思ひやりて哀れに思ひたりき。妻子に引かれぬ人もなければ、命を惜しまぬ人もなし。それを思ひ捨てて、義によりて死ぬるは死にがたきものなり。その死ぬる時、人に譽められん、令名（よめ）を揚げん、子孫に功名を傳へんなどの心にては、死なるゝものにあらず。たゞ君恩の有難き、臣の道の重きによりて

死ぬる心ならずば、その欲（生の欲）を思ひ絶つことはならぬものぞ。汝等の戦功はそれにもよらず、匹夫の勇にして、もと實情より起らぬにてはなきかと思ゆるなり。さて、頼もしからず、とて涙をこぼししに、郎等宗徒の人々も赤面して退きたりきとぞ。（大學講義）

一三 松葉仙人

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦みなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく。といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふまことに食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、漸く兩三年になりけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなるとするなり」と常（い）はいひて、今々（い）とて、内々にて身を飛びならひなどしけり。既に飛びて上りなん」といひて坊も

金剛寺
河内國南河内
郡にある
眞言宗

何も弟子どもに分ち譲りて、上りなば仙衣を着るべし。とて、かたの如く腰に物をひとへ巻きて出立つに、我が身にはこれより外は入るべきものなし。とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰につけて、既に出てにけり。

弟子（僧の徒、修行者）同（同じ）朋（友）な（な）ごり（ごり）惜（惜）しみ（しみ）悲（悲）し（し）び（び）聞（聞）及（及）ぶ（ぶ）人（人）遠（遠）近（近）市（市）の（の）如（如）く（く）に（に）集（集）り（り）て、仙（仙）に（に）登（登）る（る）人（人）見（見）んと（と）て（て）つ（つ）ど（ど）ひ（ひ）たり（り）ける（る）に、この僧（僧）片山（片山）の（の）そば（そば）に（に）差（差）出（出）でたる（た）いは（は）ほ（ほ）の上（上）に（に）の（の）ぼ（ぼ）り（り）ぬ（ぬ）。一度（一度）に（に）空（空）へ（へ）の（の）ぼ（ぼ）り（り）な（な）んと（と）思（思）へ（へ）ども、近く先づ遊びて、事（事）の（の）や（や）う（う）有（有）標（標）人々（人々）に見（見）せた（た）て（て）まつ（つ）ら（ら）んと（と）て、かの巖の上より、下に生ひたりける松の枝（枝）に（に）お（お）て（て）遊（遊）ばん（ばん）。といひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈ばかりありけるを、さかさまに飛ぶ人々目（目）を（を）す（す）まし（し）哀（哀）れ（れ）を（を）う（う）か（か）べ（べ）たる（た）に、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも、身重く力（力）う（う）き（き）く（く）として弱（弱）りに（に）ければ、飛びはづして谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、これほ

用意としてある

どのことなればやうあらん、定めて飛上らんずらんと見るほどに、谷の底の巖（巖）にあたりて水瓶も割れ、また我が身も散々に打損じて、たゞ死（死）に（に）死（死）に（に）ぬ（ぬ）れば、弟子眷屬騒ぎ寄りて、「いかに」と問へば、いらへもせず、僅に息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へ昇入れつ。こゝに集れる人笑ひの、しりて歸りけり。
さて、この僧（僧）ある（る）にも（も）あ（あ）ら（ら）ぬ（ぬ）様（様）にて（て）痛（痛）み（み）臥（臥）せ（せ）り（り）。と（と）か（か）く（く）い（い）ふ（ふ）ば、かりなくて、弟子も恥かしながらあつかふあひだ、松の葉ばかりに（に）て（て）は（は）命（命）生（生）く（く）べ（べ）く（く）も（も）見（見）え（え）ね（ね）ば（ば）、とし（し）ご（ご）ろ（ろ）い（い）み（み）じ（じ）く（く）食（食）ひ（ひ）の（の）き（き）つ（つ）る（る）五穀を（を）も（も）て（て）、さ（さ）ま（ま）ん（ん）い（い）た（た）は（は）り（り）養（養）へ（へ）ば（ば）、命（命）ば（ば）かり（り）は（は）生（生）く（く）れ（れ）ども、足手腰も打折（折）り（り）て起居もえせず。今は松の葉食ふにもおよばず、もとの如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもにゆゝしく譲りたりし坊も寶も取返して、かゞまりあたり。（十訓抄）（あまの思慮事）

小澤蘆庵
京都の人、江
戸時代の後、
享和元年十
九年歿、七
元

山崎の麓を流る
大堰川月と花とのおぼろよに。

ひとりかすまぬ浪の音かな。

小澤蘆庵

加藤千蔭
江戸の人、江
戸時代の後、
文政五年(一
八二四)歿、
七十五

隅田川
着てくだす筏師に、よそ

かすむあしたの雨をこそ知れ。

加藤千蔭

かほはしまに
たりとすれに
おどりやへる
もふなみちと
るおふなみち
るおふなみち
るおふなみち

いはいにふれぬ、おぼろよに、さきとくへる
ちよめなみちをふとくしふまき海

蹟筆海春

村田春海
江戸の人、江
戸時代の後、
文政六年(一
八二五)歿、
七十六

心あてに見し白雲はふもとにて、

思はぬ空に晴るゝ富士のね。

村田春海

村田春海

琴後集あり

清水濱臣

香川景樹
因幡の人、
江戸時代の後、
天明三年(一
八二二)歿、
七十四

こほろぎの鳴くねしめりてふくる夜の

のきばさびしき雨そゝぎかな。

香川景樹

桂園派

加納諸平
和歌山の人、
江戸時代の後、
安政四年(一
八三三)歿、
五十二

荒熊はゆくへも知らず杉山の

うつほにこもる木枯のかせだすか雨の音かな。

加納諸平

述べ懐
斯はのりう
ひなき世を
物の思ひける
かな思ひける
かな思ひける

述べ懐

新こころうきいふ、世を飲けの
あふくま物と思ひける、しる杉

蹟筆景樹

熊谷直好
周防の人、
江戸時代の後、
文久二年(一
八六一)歿、
八十三

接頭しきる麓の里の雞が音に、

熊谷直好

名所花山見し
ふのくはす
みのおくは
らねども見
らねども見
くらねども
るなりけり
くならけり
紀

足代弘訓
江戸時代後
の國學者安
政三年歿

橘曙覽
越前國の人
歿年明治十
七年

八田知紀
薩摩國の人
歿年明治十
五年

あけてそわたれ三保の松原。

蹟筆紀知

○ 世の中は八重山吹の花だ（かき云葉）
更なる心
みなきことのみもてはやしつゝ
内房の空をこ

足代弘訓

○ 歸り来ば脚絆の紐もとかぬまに、

橘曙覽

まづ顔見せよ待ちつゝあるぞ。

八田知紀

○ 夕涼いひあはせたる心地して、
に出づれば出づる山の端の月。

太田垣蓮月
名は誠女流
歿年明治十
五年

海上雪
おきはちかへり
きしるのみんき
はちしるのみん
はちしるのみん
はちしるのみん

落石直文

明治五年
三才以上京
明治五年
明治五年
明治五年

與謝野寛
京都府人
明治六年
森鷗外
島根縣人
醫學博士
陸軍文
學博士
陸軍文
學博士
陸軍文
學博士
陸軍文
學博士
陸軍文
學博士

○ 山里は松の聲のみ聞きなれて、

太田垣蓮月

風吹かぬ日は淋しかりけり。

蹟筆月蓮

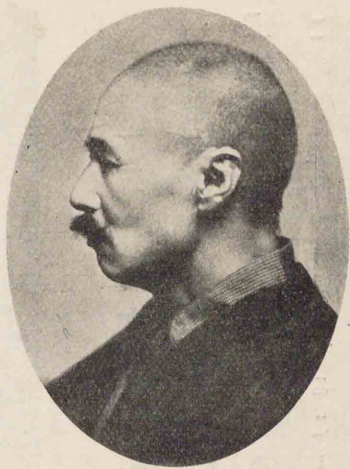
一五 新文學の先驅者

水上瀧太郎

與謝野寛氏の歌集「相聞」に森鷗外先生の序文がある。その首に「二體今、新派の歌と稱してゐるものは、誰が興して誰が育てたのか。この間に『俺だ。』と答へることの出来る人は、與謝野君を除いて外にはない。」といふ一節がある。試に問へ、「二體今、大正の文學と稱してゐるものは、誰が興して誰が育てたのか。」と。この間に「俺だ。」と答へ

ることの出来る人は、森鷗外先生を除いて外にはない。少くとも先生がゐられなかつたら、今日の日本文學を育てるには、なほ多くの歳月を要したであらう。その先

森生が亡くなられた。



鷗外

明治大正に互つて、今日まで筆執るほどのものは、たとひ直接先生の門に入出してその教を受けなかつたとしても、その影響を受けぬものは殆どないといつても差支ない。非凡な頭腦と比類のない精力とを以て、あらゆる方面の先驅をした先生の拓かれた道を、多數のものは遙に遅れて、とぼ／＼と辿つて來たのである。

洵に先生は先驅者だつた。先驅者としての誇と、先驅者としての寂しさを、先生は生涯身にしみ／＼と味はれただらう。先生

を想ふ時、私の胸には常にその孤獨の姿が描かれる。

先生が始めて筆を執られたのは、明治十四年の頃だと聞く。自分などが多少なりとも理解を以て先生の文章を讀むことが出来るやうになつたのは、明治三十年代のことだから、先生が若々しい意氣を以て、頭の悪い世人の所論に容赦なく痛撃を加へられた時代のことは、明白には知るよしもないが、察するに、知識欲に燃え、學問の研究に心を傾け、且藝術家としては、その鋭敏な神經に觸れる一切のものに、活々とした感應を持つてあますほど持つてゐられた先生にとつて、論ずるもの自身の頭の中でさへはつきりしない思想と、その發表された論理形式の矛盾とは、見るに見兼ね、許すに許しがたいものだつたに違ない。

先生のお書きになつたものを自分が始めて讀んだのは、幾歳の年だつたか確とは記憶せぬが、兄の本箱の中にあつた「めざまし草」

兄名は泰二、明治十三年生、日本銀行員、めざまし草、月刊の文學雜誌

白水
少年風葉
弟

硯友社

少年世界
月刊の少年雜
誌
紅葉
尾崎徳太郎
露伴
幸田成行
二葉亭
長谷川辰之助
柳浪子
鏡花
泉鏡太郎
小説
文藝俱樂部
新著月刊と
月刊の文
藝雜誌

を竊み見たことは今も明に覚えてゐる。子供の時から穎才を以て稱された兄は、藝術に對して強い憧憬と正しい理解とを有つてゐた。七つちがひの弟に生れた自分は、この兄のお蔭で「少年世界」に對する興味を失ふ頃、一足飛に一流の作家の作品に接することが出来た。

平凡

兄の本箱には、紅葉、露伴、鷗外、二葉亭、柳浪、鏡花、その他の優れた當時の諸家の作品とともに、その頃文壇の權威だつた「新小説」や「文藝俱樂部」や「新著月刊」などがいつぱい詰つてゐた。自分の茶碗や箸は、必ず庭の清水で手づから洗はねば承知しなかつたほどに潔癖だつた兄は、また此等の本を大切にすることが一通りではなかつた。折目もつかず、汚れ目も見えぬ本が、文學好きの少年にとつては、涙ぐましいほど懐かしい紙の匂を罩めて、兄の勉強部屋の押入の中の本箱に整然と納めてあつた。餓鬼大將になつて、近所の子

供達を集めて、角力を取つたり、陣取をしたりして、一日中あばれ廻る自分ではあつたが、時には屢、人目を避けて、大人の讀む本を竊み見る興味は早くから持つてゐた。他人が手をつけて汚すことを怖れる兄の留守を窺つて、自分はその本箱にある本を殆ど悉皆讀んだ。「めざまし草」などはむづかしくて解らなかつたが、それでもこれを愛讀したのを考へて見ると、一面には甚だ子供らしかつた自分も、一面には甚だ早熟だつたものらしい。

紅葉先生の偉さは解つても、鷗外先生の偉さはあまり解らなかつた。何かの折に、兄が紙片に書いた小説家番附といふものを見ると、鷗外先生が横綱か張出大關かになつてゐたので、そんなに偉いのかと驚いて、先生の作品を繰返して讀んだけれども、やはり解らなかつたことを覚えてゐる。まだ小學校時代のことだつた。今考へても、その時の歡喜がまざくと蘇つて、胸が躍つて、涙を

即興詩人
アンデルセン
(1805-1875)
原著・森鷗外
譯者・森鷗外
陽三十五年春
陽堂發行

さへ催しかねないのは「即興詩人」を読んだ時のことである。その時は既に中學に入つてゐた。所々讀めぬ字はあつたが、曾て一度

古い手帳から

(其九) M. R.

Augustinus

中世の神の國と云ふ思想は四五世紀の間に出た

Aurelius Augustinus *De civitate Dei* (libri XII)

として代表せしめることが出来る。

森鷗外 筆蹟

も見たことのない
清新な文體を幾度
朗誦したか解らぬ。
好きな個所は諳記
した。恐らくは、自
分達と時代を同じ
うする詩人、小説家、
その他文藝の愛好
者で、曾て「即興詩人」
を讀んだことのない
人は極めて稀で、

古い手帳から

(其九)

M. R.

中世の神の國と云ふ思想は四五世紀の間に出た Aurelius Augustinus
の書 *De civitate Dei* (libri XII) をして代表せしめることが出来る。

また一度でもこれを読んだ人は、その若かつた日を追憶して、歡喜の波を胸に打たせぬものはなからう。

激湧する「と好む」

「即興詩人」の翻譯は原作以上と稱せられてゐる。論を好むものは、翻譯は原作をあるがまゝに傳へるべきで、原作以上と言はれる翻譯は、忠實な翻譯でもなく、名翻譯でもない」と言ふだらう。現にそんなことを利口ぶつて言つたものもあつた。そんなことを言ふものには勝手に言はせておかう。自分達は、原作の内容を盛るのに、更に適切な文體を以てせられた鷗外先生の一事業として、また自分達の文學的生涯に於て比類のない歡喜に打たれた好記念として、永久に「即興詩人」を讚美しよう。

優然と喜ぶ
みたりはりし

Hartmann

ハルトマンの審美學説を紹介して洒落と機智と漫罵との外には批評の言辭を知らなかつた人々に、嚴正な批評の根據を知らせられた先生は、一方に於ては、自ら新體の創作を發表し、世界各國の

ハルトマン
ドイツの哲學
者 (1842-1906)

小説・戯曲・詩歌を翻譯して文學の模範を示された。「水沫集」つき草、
 「かげ草」などは、いづれも文學に志すものに深い感動を與へ、また彼
 等の行くべき道を指示した偉大な記念塔（作者）である。
 今更茲に先生の自分達に残された功績を事細かに述べる必要
 はないが、もう一度今日の文學は先生に育てられたものであると
 いふことを繰返して言つておく。若し明治文學史から先生の存
 在を完全に消すことが出来るなら、その文學史の殆ど全部が書直
 されねばならぬ。即ち今日の創作評論の形式は、よほど現在のそ
 れと違つたものとなつてゐるだらう。違ふといふよりも、發達の
 初期をさまよふものといった方が適切かも知れぬ。それにも係
 らず、世間は先生に對して、眞情を籠めて感謝の意を表したらうか。
 先生の著作が専門家に與へた偉大な影響に引換へて、一般受けの
 しなかつたことを以てすれば、否と答へる方が適當である。文壇

の人々さへ先生に追隨することはむづかしかつた。まして所謂
 民衆は先生を理解し味得することが出来なかつた。これやがて
 先驅者の免れることの出来ぬ運命だつた。

自修文

一六 サフランと私

森 鷗 外

名を聞いて人を知らぬといふことが随分ある。人ばかりでは
 ない、すべての物にある。

私は子供の時から本が好きだといはれた。少年の讀む雑誌も
 なければ、巖谷小波君のお伽噺もない時代に生れたので、お祖母様
 がお嫁入の時に持つて來られたといふ百人一首やら、お祖父様が
 義太夫を語られた時の記念に残つてゐる淨瑠璃本やら、謠曲の筋
 書をした繪本やら、そんなものを有るに任せて見てゐて、凧といふ

巖谷小波
 名は季雄、
 京市の人、
 治三年生、
 伽噺作家
 お明東

ものを揚げない、獨樂ひとりごとといふものを廻めぐさない、隣家の子供との間に何等の心的接觸も成立たない。そこで、いよいよ、本に讀耽つて、器物に塵が附くやうに、いろいろの物の名が記憶に残つた。そんな



父
名は静男

波小谷巖

風で名を知つて物を知らぬかたは、
になつた。大抵の物の名がさうて
ある。植物の名もさうである。

〔和蘭〕
オランダ
Holland

早くから少しづつ習つた。文典といふものを讀む、それに前篇と後篇があつて、前篇には語を説明し、後篇には文を説明してある。それを讀んでゐた時、辭書を貸して貰つた。蘭和對譯の二冊物で、大きい厚い和本である。それを引繰返して見てゐる中に、サフランといふ語に逢着した。まだ植物

Saffran

上野
東京市下谷區
團子坂
東京市本郷區
駒込にある
も、と菊の名
所、作者の住
宅のある所
東照宮、上野
公園にある
花園町
下谷區、上野
公園の西、不
忍池の畔

學などの我が國に開けない時代の辭書だから、音譯に漢字が當嵌あてはめてある。今でもその字を記憶してゐるから、こゝに書いてもよいが、サフランと三字に書いてある初の一字は、所詮活字には有り合せまい。よつて扁へん旁ぼうを分けて説明する。「水」の扁に「自」の字である。次が「夫」の字、また次が「藍」の字である。「お父さん」「サフラン、草の名」としてありますが、どんな草ですか。「花を取つて、干ほして、物に色を附ける草だよ。見せてやらう。」父は藥筆筒の抽出ひきだしから、縮れたやうな黒ずんだ物を取出して見せた。父も生の花は見たことがなかつたかも知れない。私はたま〜名ばかりでなくて、物が見られたが、干物しか見られなかつた。これが私のサフランを見た初である。

二三年前だつた、汽車で上野に着いて、人力車を傭よつて團子坂へ歸る途中、東照宮の石壇の下から、薄暗い花園町にかゝる時、道端に

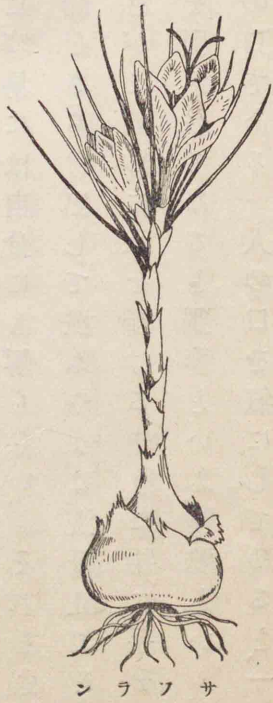
筵を敷いて、球根からすぐに紫の花の咲いた草を列べて賣つてゐるのを見た。子供から半老人になるまでの間に、サフランに對する知識はあまり進んではゐなかつたが、圖譜で生の花の形だけは知つてゐたので、「おや、サフランだな」と思った。花卉として東京でいつ頃から弄ばれてゐるか知らない。とにかく、サフランを賣る人があるといふことだけ、この時始めて知つた。

サフランにも種類が多いといふことは、これも何時やら何かで讀んだが、私の見たサフランはひどく遅く咲く花である。しかし、極端は相接觸する、ひどく早く咲く花だともいはれる。水仙よりもヒヤシントよりも早く咲く花だともいはれる。

去年の十二月だつた、白山下の花屋の店に、二錢の正札附で、サフランの花が二三十、千からびた球根から咲出たのが並べてあつた。私は散歩の足を止めて、球根を二つ買つて持つて歸つた。サフラ

ヒヤシント
ヒヤシント
もいふ、唐水
仙、風信子
白山
東京市小石川
區

ンを我が物としたのはこの時である。私は店の爺さんに問うて見た。「爺さん、これは土に活けておいたら、また花が咲くだらうか。」え、好く殖えるもので、來年は十倍にもなりませう。「さうかい。」私は買つて歸つて、鉢に少しばかり庭の土を入れて、それを埋めて書齋に置いた。花は二三日で萎れた。鉢の上には、袂屑のやうな室内の塵が一面に被さつた。私は久しく目にも留めずにおいた。すると、今年の一月になつてから、緑の糸のやうな葉が叢つて出た。水もやらすにおいたのに、活氣に満ちた青々とした葉が叢つて出た。物の生ずる力は驚くべきもので、あらゆる抵抗に打勝つて生じ、伸びる。花屋の爺さんのいつたやうに、定めて



ンラフサ

球根も段々殖えることだらう。

硝子戸の外には、霜雪を凌いで福壽草の黄色い花が咲いた。ヒヤシントなども花壇の土を裂いて葉を出し初めた。書齋の内には、サフランの鉢が相變らず青々としてゐる。鉢の土は袂屑のやうな塵に掩はれてゐるが、その青々とした色を見れば、無情な主人も折々水ぐらゐやらすにはゐられない。これは目を娛しませようとする利己主義だらうか。それとも、私なしに外物を愛する愛他主義だらうか。人間のすることの動機は、縦横に交錯して伸びるサフランの葉のやうに、容易には自分にも解らない。それを強ひて胭脂を舐めた蛙が腸をさらけ出して洗ふやうに、洗ひ立てをして見たくもない。今私がこの鉢に水を掛けるやうに、物に手を出すと彌次馬といふ、手を引込めてゐると獨善といふ、殘酷といふ、冷淡といふ。それは人の口である。人の口を氣にしてゐると、一

交錯
入りまじる

本の手の遺場もなくなる。

これはサフランといふ草と私との歴史である。これを讀んだら、いかに私のサフランについて知つてゐることが貧弱だが解るだらう。しかし、どれほど疎遠なものにも偶、何かの接觸はあるやうに、サフランと私との間にも接觸點がないことはない。これまで、宇宙の間で、サフランはサフランの生存をしてゐた、私は私の生存をしてゐた。これからも、サフランはサフランの生存をしていくだらう、私は私の生存をしていくだらう。(妄人妄語)

一七 風と雨

上原敬二

一 風

風は氣象界にあつて最も強い聯想美を將來する。古來四季に吹渡る風は何れも詩化され詩題とされてゐる。吹雪、野分、木枯、筑

上原敬二
東京市の人、
明治二十二年、
生、林學博士、
東京高等造園
學校長

波風・秩父風・伊吹風・梢搖る風・萩の下露零す
風などと詠ぜられる。水を渡り氷を割る

しるあそび

風。春は花吹雪。秋は稻田渡つて黄金の波を揺

上原敬二自署

がす風。颯々の音、颯々の聲、松籟の響。

風は單に空駈ける音ばかりでは、何等の興趣をも起させぬ。それが渡り行く物を得て、始めてそれと意識させる。窓打つ音や、電線を響かせる音は、さして興もないが、葉を戦がせる風の音は、春の若芽といはず、秋の紅葉といはず、冬の常磐木といはず、人の心に快さを覚えさせる。「そよご」「やまならし」などといふ樹の名は、風を受けての戦ぎから來たのである。中にも、「やまならし」は、峡谷に踞し、谿流に臨んで、絶えずはた／＼と快いそよるやうな葉音を立てる。此等の外、棕櫚・笹・芭蕉の類まで、時には呼笛また口笛の音かと思はれるやうな鋭い葉摺の音を立てる。梢を渡る音、木の間を漏れ

木立を縫ふ音、下草の上を滑る音、心を落着けてこれを聞けば、自然の靈妙さがひし／＼と身に迫る。

二 雨

雨の音が閑寂で優しみのあるものとして聞かれるやうになるのには、美意識の修練を経ねばならぬ。古來雨を題材とした詩歌は頗る多い。さうして、その名稱までも詩化して、春雨・五月雨・夕立・村雨・時雨などと呼んでゐる。

詩趣に富む雨の音としては、軒の玉水と歌はれる點滴が第一であらう。軒から落ちる雨垂を聞くのは、雨の趣味としてこれに越したものはない。音も立てずに人の胸に甦りを傳へるものは春雨であらう。し／＼とそぼ降つて、銀糸の簾を懸けたやうな霖雨は、天地の静けさを知らせ、思索の恵を與へてくれる。一日々々と伸びて行く芭蕉の葉の色艶のよさよ。蝸牛が雨に濡れながら

スコール
南洋に於ける
驟雨

その葉の蔭に蠢いてゐる。スコールの壯快さは熱帯の地に入らなければ味はれぬが、その雨後の爽快さに至つては、全く熱氣の苦惱からの復活である。秋から冬にかけては冷たい雨が降りだす。唯一枚取残された蝕ばんだ古柿の霜葉に、冷たい大粒の雨があたつて、婆娑との音も立てずに振ひ落してしまふ。枯枝に降注ぐ蕭蕭たる寒雨は、枯淡な自然に配合された濫い趣味である。(風景雜記)

一八 雲

松原至大

松原至大
千葉市の人、
明治二十六年
生、詩人、東
京日日新聞社
員

白い小さな雲が
空に私の心に
今日も浮んでゐる

青いく透きとほるやうな

大空に浮んだ雲よ

お前の朝夕が

どんなに美しいのか
私も知つてゐる

だが私の心の中に
小さく浮んだ雲よ

動きもせず消えもせず
お前はいつた何であらう

私の心の中に

寂しく浮んでゐるのに
私にはそれが何だか分らない

あわただしい毎日が

お前のまぶしい姿を

見詰めることさえ許してくれない

もうぢまきに夕暮が来る

大空のあの雲は

今日も大きな自然の中に

うつろいと跡形もなく

溶けて行くのであらう

一九 雪前雪後

幸田露伴

幸田露伴
名は成行、
京市の人、
應三年生、
學博士
文慶東

雨も好し、露も好し、霰も、霽も、天より降るものの面白からぬはな
きがなかに、雪はまた特にめづらし。降らんとして未だ降らず、灰
色の雲の大空を蔽ひて、風なき寒さに雀ふくらむほどはともあれ
かくもあれ、そと下す風に連れて、ちら／＼と降りいづる初より、檐
の玉水日に耀ふ光長閑かに融けつくす終まで何れかをかしから
ざらん。かゝるもの、初より、そと下す風に連れて、ちら／＼と降りいづる初より、檐

先づ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉
に堅き音立て、板庇にはいたく跳返りなどしつゝ、さら／＼と降り
たる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく、軽らか
に降りて、落つる間もなく色なき水の昔に返る淡々しさも懐かし
く、消ゆる／＼もいさゝかは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富
士を見せ、松、樅、樅などの梢には、天華俄に落ちかゝるか、と疑はし

みるも趣あり。
 されど、降る最中の雪の見て美し
 きは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣
 既に動きて陰氣なほいと盛なる時
 のことなり。細かならず水めかぬ
 雪の大きく且輕やかに、霏々紛々と
 して盛に下るに當つては、櫻花の春
 天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふ
 が如く、一江の野渡には、對岸を虚無
 に封じて仙境の縹紗を欺き半衢の
 陋街には、連屋を瓊瑤に包んで蜃樓
 の巍岬を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、
 鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあや
 さま



川畔の雪景

に美しき限りなり。

凡べて降る時の眺には、廣き處より狭き處好し。玉屑珠塵いと
 清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降り
 しきる真中は、遠きは全く見えずして、廣きは却つて狭くなり、近き
 は聊か霞みて、狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よ
 りは市中の園宜し。

霽れての後こそ雪は目覺ましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明
 かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊去つて銀曇なき地の皎
 皎と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日はたゞ裾寒き風
 の枯草を吹くのみなる空野の取りどころなきに面白く思はる。
 「馬をさへ眺むる」と人の言ひたる日、朝日の光いと花やかなるに、疎
 林に禽起つて飛んで又還る、ありふれたる郊外の様ながら、もよし。
 西の京は、金閣銀閣真如堂岡崎東山清水、悉く晝とすべし。 梅尾

馬をさへ眺むる
 雪のあした
 蕉かな(松尾芭)

金龍山
海へ来て
はののには

山王臺 鷗町區
溜池 山王臺の東南麓にあつたが今は埋められた
待乳山 隅田川の西岸に浅草公園に近い小丘

横尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖は鬼斧にまじりてある。任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐るに流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、壁の簀を戴ける松の叢立のあたり姿を(も)見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなど二十年の昔の今の胸になほ鮮かなり。
東の京は御溝の水おだやかに浮寝の禽の夢もやすけく雪に閉かなる大御代の晝また比なくめでたし。山王臺今なほ好からんが溜池のありし昔いたづらに懐かし。不忍の池一望千頃の景は言はずもあれ、石橋のさ、やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば敗荷の殘莖に、一撮の白きものを見たる、これも捨てがたき風情あり。暮れてなほ暮れがたき雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゞめきを聞きたる水に色なく、聲に白さありとや言ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好

鬼神の斧
まじりてある
松の叢立の
自然の

橋干の玉を展
樹立の鷺を宿す

相生橋 深川區越中島から京橋區新橋に架した
中島 越中島の別名
大町桂月 名は芳衛、高知縣の人、文章家、大正十五年卒
新年 大正十三年一月
葛温泉 青森縣上北郡法奥澤村
杉浦重剛 滋賀縣の人、日本中學校長、前東宮御用掛、大正十三年卒
閣下 小笠原長生、舊唐津藩主、慶應三年生、海軍中將

し。一條の碧四方の白げに武藏野を分きて流る、川なりとたふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯なき海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに、劃りて一幅の晝としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(洗心録)

色にまじりて
川

非一帯に一層

橋に雪をのせてある



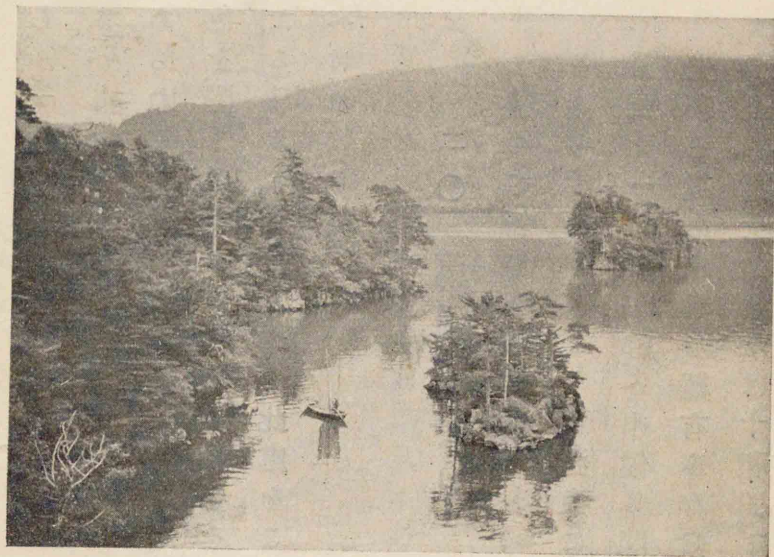
二〇 葛温泉より

謹んで新年を奉賀候。

昨年十月半ばより葛温泉に参り、杉浦重剛先生傳を草し、十二月三十一日にて終へ申候。閣下の御談話の筆記此の書に一大光彩を放ち申候。難有奉存候。
山は富士山、湖水は十和田。私は常に申居候。葛温泉は十和

大町桂月

やゆしたあかりに景色を
きりきりして



十和田湖

田の山中に有之候へども、湖水よりは四五里も離れ居候。東北本線の古間木驛より三本木町まで四里、輕便鐵道有之、それより焼山と申す五六戸の小部落まで六里、夏は自動車通じ申候。

燒山は蔦川の奥入瀨川に合する處、燒山より奥入瀨川を遡ること三里半にして十和田湖に達し申候。此の三里半の風致、溪流としては天下無類に候。十和田湖にて

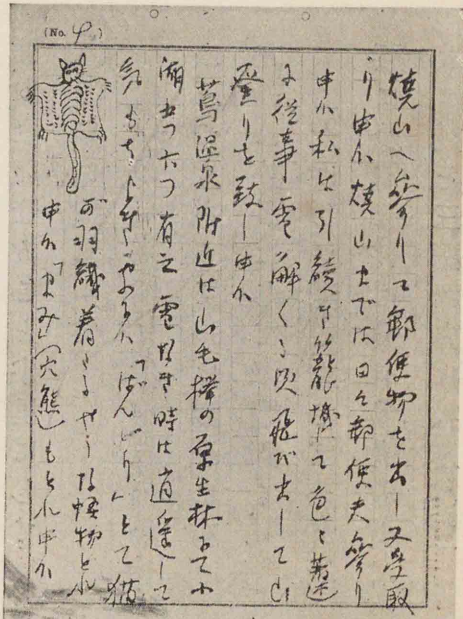
は、御倉中山の兩半島の斷岸絶壁奇巖怪石老樹古木が天下無類に候。自動車は湖畔までも通じ申候。

燒山より蔦川を遡ること半里、山坂を登ること半里にして蔦温泉に達し申候。

山中の一軒屋に候が、風呂場は三つもありて、一は湯瀧に有之、一は狭長にして湯槽深く、一は廣大にして淺く、立てば湯が腰に及ぶだけに候が、湯槽の大きき凡そ三間四方にも及び、三



蔦温泉



小笠原生長宛に於て大町桂月の簡書の第一節

方空地にて硝子窓なれば、浴しながら月を賞することを得申候。
 土地は清淨、人は純朴、殊に今や積雪三尺も有之、四月の末までは解け不申候。積雪の爲に往來絶えて、心がのんびり

致候。

宿の若者、數日の間に一度、雪を衝いて焼山へ参りて郵便物を出し、又受取り來り申候。焼山までは日々郵便集配人參り申候。私は引續き籠城して、色々著述に従事し、雪解くる頃飛出して山登を致し可申候。

金波淨瑠璃
 曾て小笠原子
 爵が作つて發
 表した淨瑠
 璃、子爵は金
 波樓主人と號
 する

葛温泉附近は山毛櫟の原生林にて、小湖五つ六つ有之、雪なき時は逍遙して氣持よき處に候。「ばんどり」とて、猫が羽織着たるやうなる怪物捕れ申候。「まみ」穴熊も捕れ申候。何れも頗る美味に候。今夜は舊の十一月二十七日に候。故郷の姉より手紙にて、「今夜は月の出に阿彌陀様がお現れになるから拜め」と申來り候。姉は佛教信者にて、それを信じ居候。私は信じ不申候へども、親は既に無之、兄弟中生殘れるは唯姉と私との二人、其の姉が南國にて見るらん月を、私は此の地にて見て姉を偲ばんとて、徹夜致し居申候。

傳記執筆中、閣下の御談話に感ずること深く、思は私の全集に賜はりたる御感想に及び、曾て文部省にての拜芝に及び、更に金波淨瑠璃に及び、茲に新年を賀すると共に、謹んで御清福を祈り、下らぬことども申上げて新年の御笑草に供し申候。恐惶頓首。

行 二一 河水清 (大正十五年新年勅題)

皇后宮御歌

河水の瀬ごとに音はかはれども、

おしなべてこそすみあたりけれ。

攝政宮御歌

廣き野をながれ行けども最上川、

うみに入るまでにごらざりけり。

東宮妃御歌

水底のさぐれのかすもよむばかり、

河の流のきよくもあるかな。

選歌

愛知縣 片岡宅郎上

犬山の城の白壁さやかにも

うつりてきよし水曾川のみづ。

滋賀縣 山本順藏上

さと人がひける筧にわかれての

すゑもにごらぬ山川の水。

大阪府 寺部君子上

池田人酒にかもして猪名川の

きよき水こそ世にかをりけれ。

兵庫縣 大年神社社掌 大塚熊太郎上

忌籠をいはひ沈めし神代より、

にごらざりけり丹生の川水。

長野縣 白鳥千代子上

初日影にほふわらやの日のみ旗、

うつるもきよし里川の水。

秋山光夫
今は東京帝室
博物館鑑査
官、宮内省御
物管理委員

尾上八郎
號は柴舟、阿
山縣の生、明
治九年、文學
博士、東京女
子高等師範學
校教授

法題
河水清
多に心をすすめたるやまの
ろくろを水よきよきにぞ知る

蹟筆夫光

里人が馬あらふにはをしきまで、

流るゝ水のきよくもあるかな。

官内省圖書寮編修官補 秋 山 光 夫上
三重縣 森 たね子上

谷川をむすびてすめる山人の

こゝろを水のきよきにぞ知る。

二二 歌御會始拜觀の記 尾上八郎

明治三十九年二月七日、余はおほけなくも九重の御階を上りて、正殿の奥なる御廊下に立てるなり。

玻璃の御障子を通して、朝日の影は麗しく滑かなる御板敷の上
に流れたり。こゝは鳳凰の御間とか。此方の欄間、彼方の花瓶、皆
その鳥の形ぞ畫かれたる。黄金の雲を分けて、翼ゆたかに天つ御



尾上八郎

空を翔り行くさま、言知らずめて
たし。芝生に續きたる御築山に、
鶴は一點の雪を印せり。砌近き
老梅一樹は、無数の瓊を綴りて、鐵
幹御障子の上に横さまにうつろ
ひたり。

御室の内外に備へられたる御椅子の數々、菊の御章いと鮮かな
り。彼方は御座、かれは點者、題者の料、これは讀師、講師、發聲、講頌な
どの料、それは奉行等の料、御廊下にあるが皇后宮大夫、寄人などの
料、次のは我等のなりとか。此方へと導かるゝまゝに居寄れば、時

正に午前十時三十分。

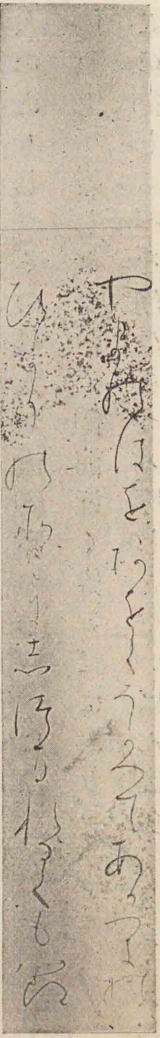
遙に物音聞ゆ。「御靴のなり」と聞くもいと畏し。起ち上りて、敬禮して待ち奉る。御音いよ、近うなりぬ、御室にや入らせ給ふらん。御音絶えぬ、御座にや着かせ給ひし。

頭擡ぐれば、既に御机を前に御椅子に倚らせ給へり。彼方には内大臣侍従武官の君達皆着座せられたり。思へば、小學校にて御影迎へまつりしは、はや十餘年前。いつか斯くけぢかうには思ひかけたりし。行幸のをり、人垣の繁みに立隠れて、御車の影仰ぎ奉りしをだに、こよなき身の光榮とは誇らひたりき。あはれ、今日のこのけぢかき忝さを何とかいはん。

御式は始まりぬ。讀師の差出す懷紙を受けて、講師は緩やかに讀出づ。若やかに麗しき聲は水のやうに流れて、端嚴の氣は愈滿渡りぬ。講師讀果つれば、發聲講頌諸聲にいと永やかに誦し始む。

やまのほを
あつきのべ
あくのつひ
あまのつひ
あまのつひ
あまのつひ
あまのつひ
あまのつひ
あまのつひ
あまのつひ

神の恵み
たひらかに
立ちかへる
十の川の
み深きを
汲む



八郎筆蹟

まづ、乙のしらべとか、や、低けれど、追らず弛まず悠揚たる聲、御空行く雲とやいはん、海に近き流にやたぐへん。

懷紙は幾度か改まりぬ。改まり行くまゝに、しらべはやう／＼高くなりぬ。甲に移りしにやあらん。暫くして、東宮の御歌、「といふ聲響き出づ。すはとて起ち上りて、恭しう耳傾ければ、同じしらべもまた改まりたる心地す。神の恵みの」と打上げたる畏さ。誦しまつる人の身を思ひやるにも、そゞろに涙さへこぼれ出づ。

二たび誦しまつり果つれば、御廊下なる皇后宮大夫席を離れて、御室の内に進み出づ。讀師はやをら起ち上りて、恭しう近づき寄る。御懷紙賜はらんとてなりけり。

立返る
の年波はなる
り五つは神風
立返るるらん

緑と紅とならん、目もあやなる御重懷紙を押延べつゝ、高やかに
誦し上げたるたゞ、あなめてた、あなたふととのみ覺えて、髪さへも
起ち上りぬべし。「立返るらん」と承るほど、御庭の梅の追風身に沁
渡る心地もしつ。

三たび誦しまつれば、讀師はまた進み出づ。こたびは御懷紙を
返しまつりて、更に御前に出でて、御製乞ひまつるなり。御懷紙は
賜はりぬ。讀師席に歸りて打擴ぐれば、講師は恭しう讀出づ。發
聲講頌また諸聲に誦し奉る。雍々の音、朗々の響げにこれぞ泰平を表す
のしらべと思ひまつるも現なき心地す。

二たび三たび繰返すを承るほどに、思へば、まこと我が父祖は幾
人かありし。その幾人か大御歌のしらべには
觸れし。賤しき身、かく御前近く侍るだにあり。
この御しらべを伺ひまつる、辱しとやいはん、畏多

尾上八郎自署

いかに言ひてかこの心を

しとやいはん、おほけなしとやいはん。いかに言ひてかこの心を
現し得ん。

高う低う五たび返し奉れば、和氣は御室の外までも溢れ出でて、
御間の名の鳥欄間を離れ花瓶を離れ襖を離れて、皆一時にあやの
羽交打擴げて、舞ひも出でん(か)と怪しまる

御披講果てぬ。讀師進みて御懷紙返し奉れば、つと起ちて御椅
子離れさせ給ふ。

我も人も恭しう起ち上る。御靴の音聞ゆ、御間や出でさせ給ひ
し。御響遠うなり行く、御廊下や渡らせ給ふと思ひまつるほど、御
時計は嚴かに十二を打ちぬ。

御階を下りて、御濠の畔を歸る。顧みれば、御垣の松は響さやか
に、大宮の藁は日に輝けり。

前の我や夢なる、今の我や現なる。
前の我は一作、夢も見たるわが、つとあらうか、

月波洞
梅干をいたたけはつてもあかり
葉のこころをわらわすあかり

現代國語讀本 卷六

正岡子規
名は常規、松
山市の人、三
十五年明治三十
十六年三月三十

子規佳作
新にさす
みじかき花房
雪の影

すしきかるわ
らべにあひぬ
はこれやま
子規

内藤鳴雪
名は素行、松
山市の人、俳
年大正十五年
八十五年

二三 近代の俳句

日中 飯

正岡子規

春雨や傘をかひくに渡し舟
縁日の油煙に春の夜は更けぬ
同じことを廻燈籠まはりけり
提灯の一つ家に入る枯野かな
汽車道のひとすぢ高し冬木立

子規の弟子
師東碧梧桐
高濱虚子
山藤鳴雪
萩原井泉
夏目漱石
笠川臨凡(平先筆)

元日や一糸の天子不二の山
鉢に咲く梅一尺の老木かな

子規より上りの弟子
内藤鳴雪

その成行に
まのせよ

蹟筆規子

三日月や佛戀
しき草枕
鳴雪

土岐善麿
舊號は哀果、
東京市の人、
明治十八年
生、朝日新聞社
員、恐縮

東雲のほがらくと山櫻

明月や橋高らかに踏鳴らし
馬方の馬に物いふ夜寒かな

三日月や佛戀
しき草枕
鳴雪

蹟筆雪鳴

自修文

二四 失禮仕候

土岐善麿

「……小生は七十九歳の今日迄、人に此の如き失禮仕候事は一
度も無之、因つて恐悚慄然の至に不堪候……」
この手紙には却つて私の方が恐縮してしまつた。私は二尺に
も餘る長い手紙を繰返して讀みながら、あの病床で、強ひてこの筆

昨年
大正十四年
揮毫
書畫をかくこと

擔當
引受ける

島崎藤村
名は春樹、長
野縣の生、
治五年生、
學者、
文明

を執られた内藤鳴雪翁を思はずにはゐられなかつた。この
昨年昨年の暮、私の勤めてゐる新聞社の企てた「同情週間」の義金の一
部を得るために、文藝美術の諸家に色紙短冊の揮毫揮毫を請ひ、その即
賣展覽會を開くことになつたので、私も私の知つてゐる範圍の人
人に依頼することを擔當擔當した。何しろ種々の方面に種々の事を
計畫し、しかもそれを僅かな日數の内に實現しなければならぬ
仕事の性質上、全部に互つて歴訪する餘裕餘裕がないため、手紙で願
した向もあり、紹介状を認めて、代人に行つてもらつた向もあつた
が、ある日、私は自身で麻布方面に出かけ、午後飯倉片町飯倉片町に島崎藤村
氏を訪ね、それから筈町筈町に鳴雪翁を訪ねた。酒屋の角に自動車を
停め、半町ばかり行つて、町中にある家としては閑靜な翁の家の門
を入ると、正面の玄關に、用事のある人は右側を内玄關へ廻るやう
にといふ貼紙貼紙があるので、その通りに廻つて、その格子戸格子戸を開け



土岐善磨

て、案内を乞ふと、取次の人取次が、只今食事中ですから暫くお待ち下さ
い。」といつて、二階へ通してくれた。十五六歳の女中さんが、子供を
背負つて、あぶなく火鉢火鉢を運んだり、茶を持つて來てくれたりした。
間もなく障子が開いて、一人の訪問客が通された。見知らない
ので、互にたゞ「お寒う。」とだけ挨拶し
たが、その人は坐るが早いか時計を
出して「待たされては困るな、どうし
ようかな。」と獨語をいつて、私に「鳴雪
翁の病氣はどんなのでせうか。」と訊
いた。「さあ、大してお悪いのでもな
いでせう。」と、私は軽く答へたが、その人は「今日は急ぐから、このまゝ
歸らう。」と言捨てて、女中さんの茶を運ぶのと入違ひに、そゝくさと
梯子段を下りた。

私はまた一人になつて、座敷の隅の屏風に貼交はりませた手紙や額面などを讀んでゐたが、なかく、女中さんが呼びに来ない。翁は高齢のこととて、食事にも長くかゝられるのだらう、殊に病床ではゆるると一粒々々噛みしめてゐられるのだらうと、根氣よく一時間近くも待つた。その内に、小用に行きたくなつたので、静々と梯子段を下り、臺所の方へ廻つて、便所を、といつて顔を出すと、女中さんがあわてて、あなたはいらしたのですか、といふ。「まだ御食事は濟みませんか。」と聞くと、いえ、もう濟みましたのですが、あなたは先刻急いでお歸りになつたと思ひましたので、……といふのであつた。これではいくら待つても、迎へに来てくれる筈はない。先刻あわてて歸つたもう一人の訪問客との錯覺さくかくから、いつか私は無邪氣な女中さんに存在を無視されてしまつてゐたのである。小用に行きたくならなかつたら、夜になつてしまつたかも知れない。

尉
おきな

私はそこへ出て來られた奥さんに、御病床の御食事だと思つて、御遠慮してゐましたので、……といつたが、我ながら可笑しくなつた。奥さんは、どうぞ病室へお通り下さい、といつて、その襖ふすまを開けられた。翁は厚く敷きかさねた褥じゆうの上に、尉おきなの能面のうめんを置いたやうにふつくりと横たはつて、雑誌社の人らしい二人の訪問客に向つて、何やら頻りに話してゐられた。平生の通りの談論風發で、二人の訪問客は相當こみ入つた維新當時の回顧談を、ノートに筆記しきもせず、たゞはあ、はあ、といつて聞いてゐた。もつとも聞返したり待つてもらつたりする餘裕もないぐらゐに、翁の談話には興きようが乗つてゐた。固より私が口を出す隙もない。一時間ばかり待つた後、この上この談話の興の盡きるまで待つてゐては日が暮れると思つたので、私は次の間に立つて、奥さんに「同情週間の要件を話し、印刷物と短冊とを置いて、御氣分のよい時に一枚でもいゝから書いて

内藤鳴雪筆蹟

一書認メント存候處へ午前
來來客ニテ其暇ナク心不安
ノ際御使相見エ未ダ差上可
申原稿出來仕居ズ又々心苦
ク困却チ極メ候、因テハ何
分ニモ明日筆者御來訪ヲ偏
ニ願フ所ニ御座候、重々恐
縮ナガラ茲ニ病中不得巳ノ
事情ヲ哀謝願仕候、小生
ハ今ニ自宅ノ便所へモ通ヒ
得ズ大小便ハ寢床ニテ辨ズ
ルト申ス様ナル病苦中併シ
御話シハ飽迄仕度是モ一種
ノ持ダガ病ニテ御免ヲ願上
候要件ノミ勿々敬具
十二月十三日
鳴雪事
内藤素行拜

下さい。」とお願
して、辭して、歸
つた。
三四日たつ
て、恰も展覽會
の前日、翁の許
に使を出す、と
その返事が右
の長い懇篤な
手紙で、あの日
ほど來客の集
ひし日は小生
も覚えなきぐ

らゐ。」と認めてあつた。所が、どうした間違か、短冊揮毫を願うたの
に、翁の手紙には、私が原稿を依頼したやうになつてゐる。そして、
十五日迄に原稿可差出、御來書には、筆記の方御差越相成りても宜
しくと有之候處。」とある。他の誰かの依頼と間違へられたことと
察しられた。これによつても翁の多忙さが想像される。「同情週
間」のことから、今に自宅の便所へも通ひ得ず、大小便は寢床にて辨
ずると申すやうなる病苦中「の翁の心を徒に煩はしたことを、私は
何とも相濟まないことに思つた。
病床への引見が決して病狀にいゝ結果を齎さないことは分つ
てゐながら、誰にでも快く會見される翁の元氣に敬服する外はな
い。手紙にも、「……病苦中、併し、お話は飽く迄仕度、これも一種の持
つたが病にて。」とあつたが、その元氣な翁も、これから一二個月後の
今は即ちこの世の人ではないのである。

錯誤
まちがふ

これだけの手紙を認められるよりも、一枚の短冊に得意の筆を染められる方が、御面倒の掛け方が少かつたと思ふけれども、これは依頼の用向が錯誤したので、全く翁の考慮には入らず、揮毫のことは意識にも上らなかつたことと思はれる。たゞ私は翁が病苦を押してかうした「お詫」の手紙を、私のやうなものに對しても、自ら書かれたその謹嚴な態度を尊敬しないではゐられない。いや、それよりも、來客を一時間二階に待たせたことそのことを、一生涯曾てない「失禮」を人に敢へてしたと斷言せられた翁の武士氣質に推服しないではゐられない。世上一般の人はこれぐらゐのことは「失禮」とも何とも思はずに過してゐる。若しこれを「失禮」とか「無禮」とかしたならば、大部分の社會人は一生涯「失禮」の連續ばかりやつてゐる譯である。

二階に待つてゐる間、私は待たされて、「けしからん」とも、「閉口」とも

青山南町
東京市赤坂區
齋藤茂吉
山形縣の人、
明治十五年
生、醫學博士、
歌人

溘焉
たちまち

「迷惑」とも思はず、たゞ短冊が書いていたゞければいゝがと切望し、一方には、一粒一菜よく嚙んで飲込まれる翁の老人らしい面影を想察してゐたのである。

それに、あの時、私に取つては、翁の家を辭してから、更に同じ用件で青山南町の脳病院の燒跡に齋藤茂吉君を訪ねたところ、丁度今歸つて來た」といつて、狭い燒残りの書齋に導かれ、冷たい火鉢を擁しながら、二人で快く談笑することが出來たので、鳴雪翁の宅であれだけ待たなかつたら、齋藤君には留守で逢へなかつたことにな

土岐善麿
自署

る。翁をして恐慄慄然たさせた一代の「失禮」は、偶、私に齋藤君と逢ひ得る機會を與へたのである。そのことを笑つて翁に語るの折もなく、それから間もなく、私が病院生活を送つてゐる間に、翁は溘焉として逝去された。當時、私こそ失禮した旨の手紙は出して置

潤然
さらりと疑の
とけるさま

いたけれども、親しく翁に逢つて話したならば、翁は潤然として呵
呵笑されたに相違ない。この最後の訪問と手紙とは、僕に忘れ
難い翁の追憶となつて残つてゐる。

不二五 生命の雄辯

永井柳太郎

永井柳太郎
金澤市の人、
明治十四年
生、衆議院議
員、外務省参
事、
グランドスト
ン
英國の政治家
(1839—1896)

グランドストンは嘗て雄辯の秘訣を尋ねた一青年に書を與へ
て、次のやうにいつた。(一)用語は平易を尊び簡潔なのを選ぶこと、
(二)句もまた出来る限り短く切ること、(三)發音の明瞭を心がけるこ
と、(四)批評家や反對者を待たないで、自分で豫め論點を考檢するこ
と、(五)論題について再思三考して十分に消化し、適切な語を迅速に
拈出す練習をすること、(六)思考を論題に集中し、常に聽衆を見守
ること。しかし、此等の凡べてが具備したからといつても、誰でも
直ちに雄辯家になれるとは限らぬ。眞の雄辯家になるのには、此

等の根柢に於て燃えるやうな信念を有してゐなければならぬ。」と。
大雄辯は畢竟するに大信念の別名に外ならぬのである。
聖書に「たとひ我もろくの人の言葉及び天の使の言葉を語る
とも、若し愛なくば、鳴る鐘や響く鏡鍔の如し。」とあるのもこの意味



グランドストン

である。何等の信念もなく熱誠もない
人が、徒に美辭麗句を連ね、わざとらしい
身振をして、無用な辯を弄する時ほど、人
に不快の念を與へて、その反感を挑發す
るものはない。これに反して、その熱血
熱涙が迸る時には、たとひその言語は訥
訥であり、またその研究が不十分であつても、おのづから聽者をし
て襟を正させ感激させるのに足るものがある。ニイチエはいつ
た、凡べての書物の中、余はたゞ人が熱血を以て書きたるもののみ

ニイチエ
ドイツの哲學
者 Darwin の

日蓮 安房國の人、日蓮宗の開祖、弘安五年(西暦一六二四年)六月十一日歿



永井柳太郎

を愛す。熱血を以て書け。熱血は生命なればなり」と。滿腔の熱血、これを抑へようとしても抑へることが出来ず、一管の筆端に溢れたものがそのまま、金玉の文字となつて、以て一世を風靡すると同様に、滿腔の熱血、これを抑へようとしても抑へることが出来ず、そのまゝ、三寸の舌端に發して、始めて鬼神を泣かせる大雄辯となるのである。

永井柳太郎

永井柳太郎自署

この點から考へる時は、釋迦や孔子や耶蘇や日蓮のやうな大聖が、凡べて雄辯の人であつたのは怪しむに足らぬ。三界の大導師としての釋迦の生涯、それ自身は不朽の大説教であり、孔子の言々句々もまた凡

天の鳥 新約全書馬太傳、第六章に「空の鳥を見よ、刈らす倉に收めず、然るに汝等の天の養父はこれを養ひ給ふ」地上の百合、同章に「野に百合は如何の百合に、何を思へ、勞せず、紡むざるな親鸞、日野氏、京都、開祖、弘長二年(西暦一三三三年)歿

べて經世の大雄辯であつた。耶蘇の有名な「山上の垂訓」の如き、天の鳥を指して天父の慈愛を論じ、地上の百合を示して攝理の幽玄を説いた。これを聞いたものは、いづれもその説くところの、學者等の如くならず、權威あるものの如くなるに感歎したのであつた。日蓮の「立正安國」叫、親鸞の「善を欲せず、また惡を恐れず、如來の本願に優れる喜なく、如來の本願を妨ぐるほどの惡なし」といつた、善惡を超越した絶對我的聲、またいづれか不滅の雄辯でないものがあらう。しかも此



山上の垂訓



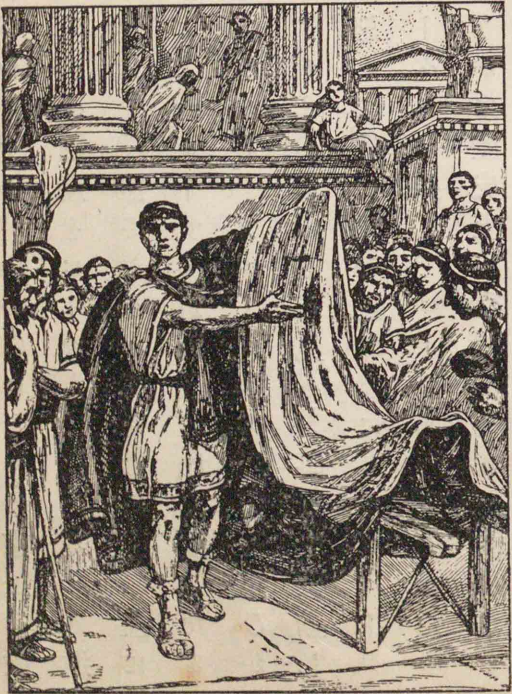
辻 説 法 (筆浦九田野)

等の大雄辯は區々たる口舌の技巧でなく、實に彼等大聖の崇高な信念と深刻な體驗と聰明な叡智と純眞な情熱とから迸出した生命そのものの雄辯であつた。

政治家となるのに必要な條件は種々あらうけれども、私はその最も大なるものは、第一に天地に通ずる不拔の信念、第二に社會の要求を知る聰明、第三に社會をして自己を理解させるのに足る雄辯であると思ふ。如何に不拔の信念を以て社會に臨み、よくその社會の缺陷を知つてこれを救はうと思つても、社會が自己を理解せず、自己に聽

シェークスピア
英國の大戯曲
作家(1564-1616)

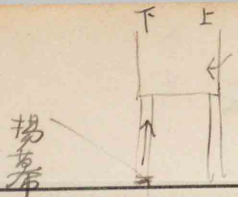
従することを肯じない時は到底その政治的理想を遂行することが出来ぬ。シェークスピアはその著名な脚本「ジュリアス・シーザー」に於て、大なる教訓を與へて居る。ブルータスはローマ人の自由のためにシーザーを刺した。やがて外へ出て群集に對し「シーザーを愛すること淺きが故にあらず、ローマを愛すること深ければなり」と叫ぶや、群集は歡呼してブルータスを迎へた。ところが、アントニーがシーザーの血に塗れた外套を携へ來つて、こ



アントニーの演説

れを群集の前に掲げ、まづシーザーがいかにかにローマの市民を愛したかを述べ、シーザーはその全財産をローマ人に與へるべき遺言を残したといつてローマ人を感動させ、やがてその外套の血に塗れたところを指して、見よ、これシーザーが天使の如く愛したるブルータスの刺したるものなるぞ。ブルータスの短刀を追ひかけて外に迸り出でたるシーザーの血の痕を見よ。」と叫ぶや、感動した群集は號泣し激昂し憤怒して、遂に戈を逆さまにしてブルータスを屠るに至つた。ブルータスが果してローマ人の自由のためにシーザーを刺したかどうかは歴史上の疑問であるが、假にローマ人の自由のために刺したのであるとしても、ブルータスはアントニイの非難に對し、よく自己の心事をローマ人に徹底させることが出来なかつたために斃れたのである。かやうな事實によつても、民衆とともに民衆のために事を爲さうと欲するものは、自己を

桐一葉
天白
禪



坪内逍遙 名は雄藏、名古屋市の人、安政六年生、文學博士

民衆に理解させるのに十分な言論を必要とすることが明白である。(永井柳太郎氏大演説集)

二六 法 難

第三幕 第二場 小松原の一部

桐一葉
新曲浦島
坪内逍遙

時雨は今は今全く霽れ上つて、大分高い處に出て居る十一日の宵月は浮雲に屢々遮られて、あたりは時々薄昏になる。此處に、中央に日蓮上人、僧衣に袈裟を掛け、手に數珠を持ち、立身、其の上手に長英坊、乘觀坊の二人が二人とも幾らか手疵を負うたる體にて、長英は戒刀を、乘觀は敵から奪つたらしき白刃を提げて居る。

三人とも上手を見遣つて居るが、長英と乘觀とは上人を諫め止めて居る體である。

乗「勿體ないことを仰せられます。」

長「どうぞ此處は私共にお任せ下さいまして、どうぞ是非お落ち遊ばして下さいまし。」

しよかの晩年作



日蓮上人

鏡忍
三十一歳の弟子で
力十人以上を
殺した
東條勢に殺され
れた

入滅
但繁
無量壽經

題目
南無妙法蓮華經

を生き返らせる死に方で、最も望む所ぢや。お前等もう手向ひは決して無用ぢや。題目を高う唱へ〜して命を終らう。乗泣きながら「鏡忍を始め私共にまで、それ程の御憐愍をお掛け下

日「いや〜、さうでない。鏡忍を見殺しにした上にお前等までどうして見捨てることが出来よう？初から法華經の爲に奉つた此の命を、正に法華經の爲に失ふと云ふ、これ程の悦が又とあらうか？人間は誰しも一度は死ぬものぢやが、斯う云ふ死に方は、一切衆生

さいまするは、有難いとも忝いとも申し上げやうは御座いませんけれども、日本國の只一本の大柱ともお頼まれ遊ばす尊師が、こんな鼠輩の爲に大切なお命をお捨て遊ばすべきぢや御座いません。是非ともお落ち遊ばして下さいまし。長「もう此處から天津までは、たかが十一二町で御座います。あそこへお落ち遊ばすまでは、屹度私共が防ぎます。どうぞお落ち下さいまし。日「いや〜、其の志は嬉しいが、此の上お前等を見殺しにすることはどうしても出来ん。お前等と一緒に死なう。乗「其のお慈悲のお言葉は、失禮ながら、大日本國をお忘れ遊ばしたお言葉で御座います。國家のお爲で御座います。是非ともお落ち下さいまし。（と泣きながら言ふ）日「いや〜、法難の爲に死ぬのが、それが即ち國の爲ぢや。」

小 東條の老僕
草 次郎の娘
藤 七郎の居る
信 七郎の父
縛 共の納屋
繫 共の屋敷
父 共の父
由 共の父
蓮 共の父
の 共の父

此の時また関の聲。
長「あゝ！ もうやつて来ました。

第三場 小松原の他の一部

中央のやゝ下手寄に、下手へ向いて日蓮上人、其の前に土下座して、上人を仰ぎ見て何事か訴へて居るらしいのは小草である。少し下手の其の脇に長巻が置かれてある。

日「それは殊勝なことぢや。それほど思うてくれるのは嬉しい。禮を言ひますぞ。けれども、わしと一緒に行くのは危い。途はよう知つて居る。わしはやつぱり一人で行く。殊にそんな刃物なんかは持つて居らん方がよい。其處へ棄てて置いて、早く此處を離れなさい。

小「お上人様、いゝえ、それはいけません。又どんな亂暴な者が追つかけて来るかも知れませんが、私がお伴します。さ、早く、

五 東條の家人
郎 景信の二十
八 九 歳 位

すぐお出掛けなさいまし。もう少うしいらつしやれば、本街道へ出ます。屹度もう天津の殿様がお迎に來てて御座います。もうすぐで御座います。早くお出掛けなさいまし。

此の途端、上手にて東條景信の聲にて、

景「しめた！ 隨に日蓮だ！ 五郎、

と叫ぶ聲が聞える。小草覺えず長巻を取つて突つ立ち、上手へ廻る。上人之を止めようとする中に、上手



小松原の法難

より東條景信馬を走らせて出で来り、

景「日蓮坊主、覺悟しろ！」

と言ひあへず、太刀を振りかぶつて斬掛けようとする。小草咄嗟に上人を押隔て、我武者羅に長卷を振廻して景信を遮る。景信苛つて、え、つ邪魔するな！ どけく！

と流石に斬下し兼ねて、二三度長卷を撥退けたが、尙うるさく遮るので、大いに怒り、

え、面倒な！

カの脊を打つ、

とむね打を食はず。是にて小草は「あつ！」と叫んでよろめき、長卷を取落してばつたり倒れる。是より先、上人は小草を止め兼ねて觀念し、傍の松蔭に佇みて、小草の殊勝な働を打守つて居る。小草が「あつ！」と叫んで倒れると、景信はつと馬を駈寄せて斬つて掛る。上人は景信が小草を斬殺したと思ひ、憤激し、今駈寄る景信をはつたと睨み、

日「無道人めが！」

と一喝する。と馬は物におびえたやうにたぢく、と後退る。此の内、小草は又むつくと起き上つて駈寄り、馬の尻尾を掴んで手強く引く。馬あばれる。景信持て餘す。途端に、天面五郎が駈けて来て、此の體を見るや否や、小草の肩先を一刀に斬下げる。是にて小草は尻尾を離して倒れかけたが、踏みこたへて、落ちてゐた長卷を拾ふや否や、

小「南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！……」

と高聲に唱へながら、無我夢中の體で五郎に斬つて掛る。五郎あしらひ兼ねる。此の以前、景信は進んで再び上人に斬つて掛る。上人は數珠を打揮つて、拂ふともなく、受けるともなく、景信の恰も斬下した一刀を受けると、數珠が忽ち裂れて、太刀先が上人の右の脇に及ぶ。と覺えず數珠を落して、片膝を地に突く。景信二の太刀を打下さうとする。此の途端向ふ揚幕で遠く箭聲が聞えて、一箭飛來て、景信の馬の平首に立つ。是にて馬が逆立となりて、景信は落馬する。と馬はすぐ上手へ

北浦兄弟
北浦忠内・忠
吾兄弟、工藤
の家人

駈去る。此の時、小草は五郎にまた一太刀斬られて、長巻を落し、倒れる。五郎は景信の落馬を手を負うたと誤解し、周章てて肩に掛けて、上手へ急ぎ退き去る。と向ふ揚幕より、工藤左近之丞吉隆、題目曼茶羅を結び附けた儘の重簾の弓を脇挟み、騎馬にて北浦兄弟外二人を随へて駈けて出で、松林の方をきつと見て、上人の無事なのを見付け、

吉「お、御安泰だ！……」

と片手にて天地を拜し、家來を顧みて、

喜べ！ 見ろ、上人は御無事で入らせらるゝぞ！ 續け者共！

と本舞臺へ來り、急ぎ馬より飛下りて、上人の前へ主従一同平伏する。

吉隆は上人を三拜し、仙道に縁を結ぶ

吉「未だ親しく御結縁ガクシキエンを蒙りませんでしたでしたが、手前儀は天津の工藤吉隆で御座います。御危難と承りまして、取る物も取敢へず駈附けまして御座います。御安泰であらせられます尊顔を拜し

まして、此の上の喜は御座いません。手前參りました上は、恐れながら必ず御安心遊ばしませ。

日「左近殿で御座るか？ まだお臥床中と承り居つたのに、早速の御來護忝う御座る。」

吉「上人の手疵に目を着け」や！ 上人には御手疵を負はせられましたか？ それ、忠吾、手遅れにならん中に早く。

日「制して」いや、決して御心配なさるな、これやほんのかすり疵ぢや……わしよりも弟子の者兩三人、わしを落さうとて、今まだあちらで大勢の敵と苦戦して居る。或はもう落命したかも知れんが、どうか彼等を救うてやつて下さい。

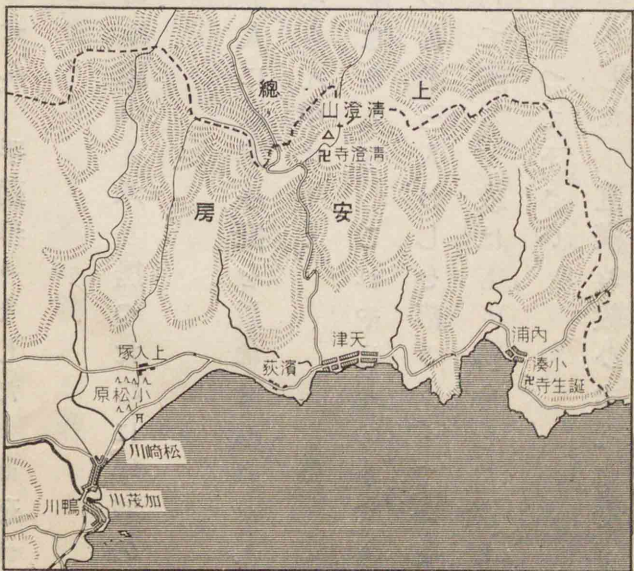
吉「では、あのお弟子方が！ 心得ました。直様お救ひ申しませう。では、北浦兄弟を見返り、貴様達は上人をお警護申して、先づ兎に角あれなる鎮守の杜モリまで御案内申上げて、早速お手疵のお手當

此の本作を國に書つたもの

をしる。おれはお弟子方をお救ひ申して、すぐ後から行く。万
一手間取るやうであつたら、先へ邸へ御案内申せ。……御免下さ
れませ。(と馬に乗らうとする)

日(とめて)「いや、其の鎮守へ
の路は心得て居る。御案内
には及ばん。それよりも敵
は大勢ぢや。御家來衆は是
非悉くお連れなさい。小勢
では心もとない。

吉「お言葉では御座いますが、ま
だ何處にどう云ふ伏勢フセが居
るやも圖られません。臆病
を名代の東條の家の子ども



などが何十人参りませうとも、忽ち追つ返して、お伴を致しま
す。……かやう申す間も心がせきます。どうか兎に角お立退き
下さいまし。……では、せめて兩人だけ。……それ、忠内、早く御介抱
して御案内をせい。源次もお伴をしる。

日「それ程に言はれるなら、一足先へ行きませうが、介抱には及ばん。
わしの介抱の代りに、あの少女を介抱してやつて下さい。あゝ、
不便なことぢや!

と上人は瞑目して、口中にて題目を唱へる。忠内立寄つて、半死の小
草を抱起し、顔を見て、

忠「お、此の娘は!

と又関の聲が聞える。此の中、吉隆は手早く曼荼羅マントラを弭ヒから脱して
巻收め、押戴きて懐中し、

吉「さ、早く……御免下されませ。

彌八郎
名は景房、東
條の家人、二
十五六歳位
四方木の兵
太
東條の家人、
十五六歳位

と又馬に跨る。忠内は他の一人と共に片息の小草を介抱して、上人を促して、花道より向ふ揚幕へ入る。
と上手より東條彌八郎を先に、四方木の兵太隨ひ、新手の兵の心にて勢ひ込んで駈附ける。
たえり、の心を見せし、梅子い

彌工藤殿に物申すぞ。各宗を讒謗し、鎌倉殿の政道を非議し、魔を使つて世を亂す狂坊主の日蓮を庇ひ立てめさるゝからは、御手前は明白に鎌倉殿の罪人で御座る。容赦は致さんぞ。覺悟召され！
カクレウ、ザンボウ、ザンブ、アハ、アハ、アハ

吉さういふお手前等こそ、惡宗門の肩を持つて聖僧を讒誣し、何の罪もなき良民を無法に殺戮して悔ゆることなき殘忍無慈悲の無道人ぢや。天に代つて吉隆が誅戮する。覺悟なさい。
と弓を投捨てて太刀を抜く。

彌何を！

東條の兵等一齊に競ひ掛る。暫くごつちやの立廻り。
叶はず、上手へ逃げる。吉隆主従それを追討ち、共に上手へ入る。
又舞臺を薄暗くする。其の薄暗い中で遠く又関の聲、其の聲の消えて仕舞ふ頃段々明るくなる。

第四場 小松原附近の鎮守の杜

中央に小さき神社。其の後にも左右にも、年を経た樹木並び立ち、よき處に鳥居。上手の一隅に御手洗の古き泉。群樹の一端より間近く海が透けて見える。此處に中央に上人切株に腰掛け、忠内は御手洗を酌んで来て、他の一人と共に上人の肱の疵を洗ひ、繻帶を參らせなどして居る。下手には小草の死骸が横たへてある。

忠「嗚、お痛み遊ばすで御座いませう。
日「いや、もう痛みは薄らいだ。お大儀、お大儀……左近殿のこと
とが心がかかりぢや。わしは此處に斯うして居れば大丈夫ぢや。

往つて見て来て下さい。
忠「畏りました。」

と忠内は他の一人を残して置いて、急いで向ふ揚幕へ入る。と上人はじつと小草の死骸を見遣つて、

日「あ、殊勝なのはあの少女ぢや。(と徐かに立寄つて、暫く合掌黙禱して)良薬は其の良薬たることを絶えて知らざらん者と雖も、之を服すれば病癒ゆる。此の一少女、生前は無智蒙昧、其の命を終る數刻の前までは、未だ曾て妙經の一語をだに分解せず、况や其の甚深の義理をや。然るに、一旦にして妙法の徳に感じ、口に南無妙法蓮華經を唱へ續けて、勇猛壯烈の武士の如くに、妙法の爲に命を献じ畢んぬること斯くの如し。其の志は古の聖者にも劣るべからず。我不愛身命、但惜無上道。南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！」

一切のものを聞きわける(南無妙法蓮華經)

此の時向ふより(花道を経て)痛手を負ひて刀を杖によるめきつゝ歩む吉隆を左右より介抱して、忠吾、忠内、又其の後よりは吉隆の家來二人に介抱されて、同じく手負の乗觀、長英出で來り、やうくにして本舞臺へ來ると、皆々宜しく上人の前に平伏して會釋する。中にも吉隆は上人の顔を見上げると同時に、嬉しげに打笑んだが、氣が弛んだらしく、がつくりとして瞑目し、もう物は言はれぬらしく、只合掌するのみである。上人は痛ましげに其の傍に立寄りて、靜に、

日「吉隆殿！ 吉隆殿！」

と二度呼ぶと、吉隆は微に目を開いたが、忽ち目をふさぎて、再び合掌する。上人も暫く無言で落涙の體、皆々も顔を舉げ得ずに泣いて居る。獻獻の聲も聞える。上人はこゝんで吉隆の手を取つて、耳元に口を寄せ、
日「無上妙法の爲に一身を献ぜられた大功徳、天晴のお手柄で御座つたぞ。姿は俗の儘ぢやが、見事に不惜身命の大行者たる務を

お果しなされた。今日只今、日蓮が上人號を參らせませすぞ。今日からは日玉上人とお名乗りなさい。……吉隆殿！ 吉隆殿！

是にて吉隆又微に目を開き、につこり笑み、又目をふさぐ。其の間少しも合掌の姿勢を崩さない。大杖 天界主 切利天王 龍尊

日蓮も或は程なく參るでもあらう。が、若し御手前の方が先であつたら、あの世へ往つて、立派に梵天帝釋、四天大王、閻魔大王等に名を名乗つてお聞かせなさい。日本第一の行者日蓮坊に随つて法難に身を捨てたとお名乗りなさい。必ず親切に優待してくれらるゝて御座らうぞよ。……

し、況や滅度の後をや。身輕重法、殺身弘法。南無妙法蓮華經！

南無妙法蓮華經！ 仏果を得て 入滅 しゃかに於ては涅槃

皆南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！

皆南無妙法蓮華經！ 智依

此の題目の續く間に、靜に幕。(法難)

二七 日蓮上人

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎、
山形縣の人、
文藝批評家、
文學博士、
明治三十五年
歿、三十二年

立ち安國

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて、類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、此の大願の前には、如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經の爲に此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。と喝破し、眼中權勢もなく威武なき眞に高天濶地獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとして豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く恩誼に深く、其の情時としては禽獸の末にまでもおよびしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。

衛門尉

四條金吾
名は頼基
江馬遠江守
名は光時
龍口
相模國鎌倉郡
川口村龍口寺
の地であらう

今左に一二の例を擧ぐべし。
上人の信者に、四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。此の人
武士の身分ながら夙に妙法に歸依して、上人の門下に列り、不惜身
命の覺悟を以て、上人と共に暮るゝの迫害を被れり。上人龍口



刑場の日蓮上人

にて斬られんと
せし時は、路上に
馬の轡を執りて
慟哭し、刑場に從
ひて殉死せんと
決心せり。上人
は深く此の人の
節義に感じ、後年
幾多の消息文に

釈迦仏の本傳

久遠 仏の弟子

と本化とるふ

首座と

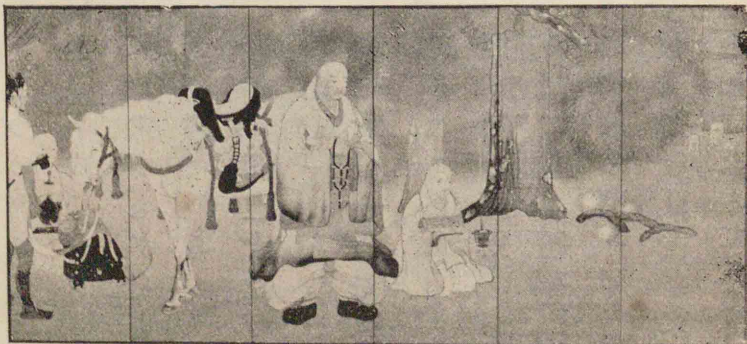
上行菩薩といひ

日蓮はこの化身といふ

二七 日蓮上人

即ち日蓮の門下 二四

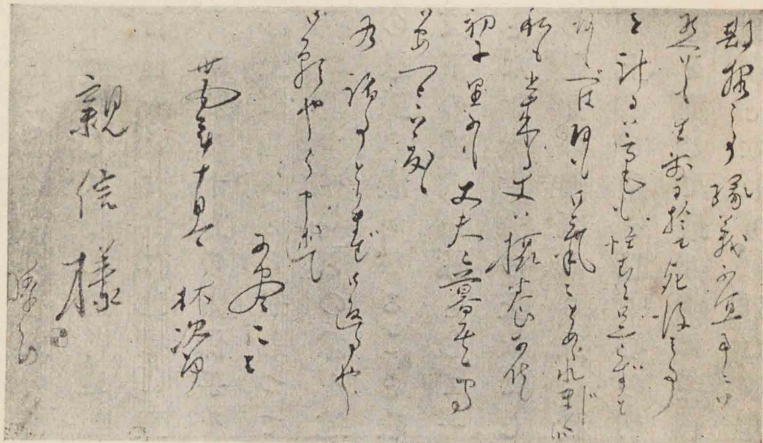
は、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就
中、殿にして若し死後地獄に墮せられなば、
日蓮もまた共に地獄に墮すべし。たとひ
釋尊及び十方の諸佛手を引き袂を捉へて
淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地
獄に墮すべし。との意を述べられたり。其
の恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。
天下の威武を敵として一步も退讓するこ
となき大丈夫の上人にして、他面に於て此
の兒女の涕涙ある殊に貴ぶべきを覺ゆ。
上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生
涯を通じて最も明に現れ、夙に本化門下の
龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六個國



(筆齋直中植) 人上蓮日るす退隱に山延身

身延山
甲斐國南巨摩郡今久遠寺のある處

房州
安房國安房郡小湊の誕生地



高 山 樗 牛 筆 蹟

斯様の事縁義不宜事には候へども、生前に於て死後の事を計るは毫も怪むに足らずと存じ候へば、何も御氣にとめられまじく候、私も出来る丈は攝養可仕候、初子・里子も丈夫に暮居候間御安心被下度候
右諸事とりませ御返事やら御願やら申述候
不盡々々
廿五年十月一日
林次郎
親信様
膝下

島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隠るゝや、九個年が間、五十餘町の嶮山を、一日も缺かさず、一日に一度は必ず攀登りて、遂に上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の

池上
武藏國荏原郡本門寺のある處
波木井氏
甲斐國の人、南部實長、身延山の地はこ贈つたのであら

中之と比較し得べき美談あるか。

上人病篤くして、甲州の身延より武州の池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乗馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書の中にも、馬を色々いたはしく思ふ旨を書かれ、をはりに、知らぬ舍人を附け候うては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、此の厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲しがたきことを爲すと同時に、人情に篤く恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に^{人にゆるぎも耐ふる}戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。此の情愛なくばかの豪邁もあらず、かの豪邁あればこそ此の情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を作るなり。かの麗しき薔

薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、其の裏面を見れば、花を織る糸即ち刺を織る糸なるにあらずや。(橋牛全集)

姉崎嘲風

名は正治、
都市の人、
治七年生、
教七、
博士、
國大、
友、
高山樗牛

二八 友の墓邊

姉崎嘲風

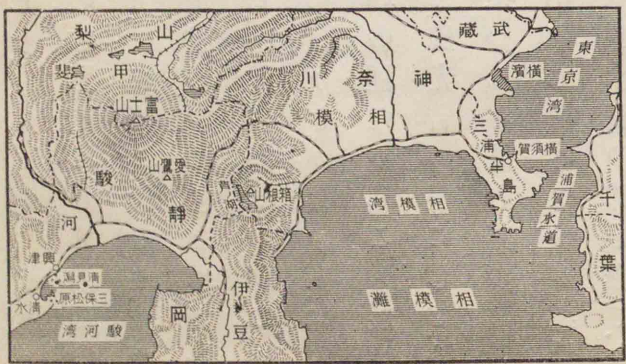
嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは、恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔たりては、面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消失せぬ。健在なれ。再び早く相見ん。との別の言葉は尙耳に響き、最後の握手は尙掌に感ぜられつゝ、見渡せば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。

嗚呼、かくて相別れたる我が友、今いづくにかある。彼は其の夜、西の方足柄を過ぎて、清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海

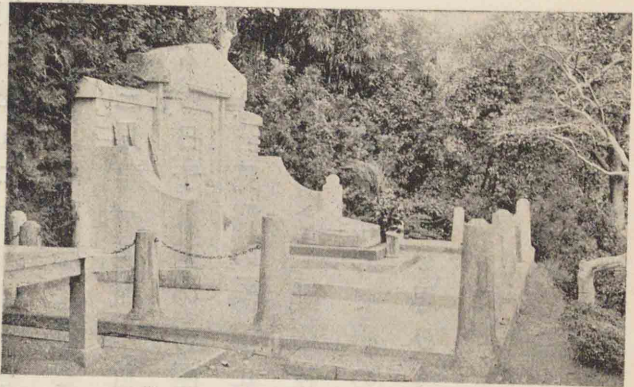
樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。三月は去り日は逝きて、五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

「三月、君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。此の夜、月明に星稀に、一灣の風露恍として夢の如し。中宵欄に倚りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。」

人生遭逢のはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫



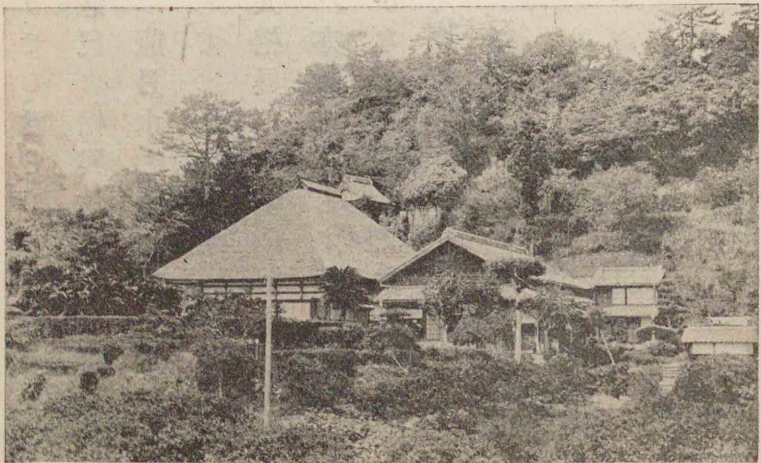
有渡の山
靜岡縣安倍
郡久能山の
別稱
袖師の松原
三保松原の
一部
埋骨の地
清水市龍壽寺



高 山 標 牛 墓

に似たるを歎かしむ。
見渡せば、有渡の山影幽にして、袖師の松原は雨に朧なり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、悉く暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海此の地、これ彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、これ彼が消魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今夜五年前の今日の別離を忍んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか、憂懷を遣らん。此の

夜、此の風光空しく、思慕の深く恨の長きを加ふるを如何にせん。
されど、徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜亦此處にあり。彼が遺文、餘薰新にして、我が思慕、日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵雨しめやかにして、夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款



龍 華 寺

暗に入り来る。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁ケイかある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴はん。歲月水と流れ去つて、五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

二九 「椰子の木」の評釋

川路柳虹

椰子の木
作。堀口大學の
人、東京市二十
五年生、詩人
川路柳虹
名は誠、東京
市の人、明治
二十一年生、
詩人

大地の苦惱から遁れるためといふやうに、
一筋にまつすぐに伸上り、
なほまつすぐに伸上り、

頂常に天上にあこがれて、
高く聳える椰子の木立！

悩みの觸手を
絶望の表情に振立てながら、
なほ高く、
なほ大地より遠く、
天の方へと差伸べたけれど
天はそこにもなく、
天は理想のやうに
いよ／＼遠ざかり、
觸れる術オケもないのに
紫の夕暮となる。

椰子の木立は
そもく、樹性の苦行僧。
大地物蔭の底に埋れ、
夕星西天に
銀青の振香爐を揺れば、
大いなる黒十字架と身をなして
彼等は祈る。
風は梵鐘の餘韻を傳へ、
潮音は果のない經を讀む。
椰子の木立は
そもく、幻の空中寺院。

金と紫の熱帯圏のこの夕、
惱ましい人間慾の
燃上る匂の渦の上にあつて、
そこに伸上り、
そこに身を十字架となして、
無言の祈に淨心するは、
それは椰子の木立か
または私の魂か。

「椰子の木は椰子の聳え立つ姿に對する作者の述懐である。そして椰子を見ることに於て、そこに自己の情感の一切を投出してゐる。

この詩に歌はれた椰子の木は、熱帯の土に生れた實在の椰子の

木である。これは恐らく作者が〔伯刺西爾〕ブラジル滞在中に得た詩材であらうと思はれるが、日頃天を指して高く／＼と伸行く椰子を眺めてゐる内に、胸に浮んで來た一つの詩的感情は、作者をして椰子の有るがまゝの姿を直ちに自己の魂の姿にまで移して歌はせたのである。この椰子の木は、さながら地上の苦惱を遁れるためのやうに、一筋に天を指して伸びて行く。しかし、その伸びて行く果に天はない。如何にその枝葉を「惱みの觸手」の如く絶望の表情を以て振立てて見ても、天には届かない。「天は理想のやうに」觸れる術もない遠い處にある。そして、既に夕暮は迫つてゐる。この椰子の木は實に苦行僧を思はせる。樹木の中の苦行者だ。「樹性の苦行僧」だ。既に夕となつて、西天に銀青の香爐を振るやうに瞬く星の出る頃にも、この椰子はなほ黒い姿をして、恰も十字架のやうな形をして立ち、天へ向つて祈禱をしてゐるやうに見える。し

かも、この苦行者の祈に對して、空を行く風は梵鐘の餘韻を傳へ、海の潮は誦經のやうな聲に絶えず音を續けてゐる。色彩の強烈な熱帯圏の「金と紫」の夕暮に、幻の空中にある寺院のやうに、物惱ましい人界の地上から伸上つて、苦行僧のやうに無言の祈に心を淨めてゐる。それは椰子の木の姿である。——しかも、この姿こそまた「私の魂」の姿ではないか。地上に即いた惱み、人間界の一切の煩惱から、ときたま遁れようと思ひ、現實の地上にありながら、「理想」といふ天へ飛上つて見る。しかも、その理想などといふ天はなかく、人間の行ける處にはない。そこで、悩みながら、たゞ現實の苦惱を遁れよう、無言の祈に魂を淨めようと悶える。吾々の心の中にあ



川路柳虹

る一つの争闘、絶えず魂の中に闘ぐ思想上の葛藤、それはこの現實を理想によつて少しでも改變しようと思へば思ふほど、身悶えをせねばならない苦悶に鎖される。椰子の木が如何に高く伸上つても天には届かないやうに、理想への努力はつまりは一つの苦闘である、惱ましい戦である。さういつた感情がこの詩を生んだのであるやうに思ふ。

この詩を形成してゐる思想的背景ともいふべきものを分解すれば、以上のやうな單純なことになるが、しかし、たゞこの思想の外郭だけを捉へたのでは、單に一種の理知的概念に墮して了つて、詩にはならない。そこで、一つの想像力が必要になつて來る。この詩の椰子の木は、椰子の木に向つて放たれた作者の想像力によつて、單なる植物としての椰子の木ではなく、作者の心象、作者の思想の象徴としての椰子の木になつてゐる。苦惱の象徴としての椰

子の木を、作者は苦行僧にも譬へ、その頂が天へと伸上つても、天はそこにもないことを、天は理想のやうにいよゝ遠ざかりとも歌つてゐる。この想像力の多彩な表現によつて、讀者は先づ熱帯圏に立つ椰子の木の惱んでゐる姿を、一幅の繪を見るやうにも具象化して感じるであらう。こゝが詩の手法としての大切な點である。作者の比喩の巧みなことも、また句の新鮮さを失はないことも、この詩に力を添へてゐる。特に椰子の木の背景となる熱帯の自然を、「金と紫の熱帯圏の夕」と簡潔に歌つたのは、實感から來たためでもあらうが、吾々に色彩の強烈な熱帯圏の空を思はせるものがある。それからまた、この詩が何等空疎に激昂したやうな調子を持たず、靜觀の中に作者の語らうとするものを伸びくと自由に語つてゐることも心地よく思はれる。吾々は現代の詩壇に於て、寧ろ論文の一節か、或は國民大會の演壇へでも立つて怒號する

やうな、殊更めいた浪漫的激情を詩の情熱であると見做さうとする多くの作に接するが、しかし、詩の力はそんな點にあるとは信じない。輕躁な激情は一時は人を刺戟し得ても、決して長く吾々の魂にまでも浸込みはしない。詩は一度讀んでそれで足りるやうなものでは、その力が甚だ薄い。詩と三面記事の違はそこにある。詩は何度繰返して讀んでも、味ふべき言葉に觸れ、内容に觸れて來ねばならない。三面記事は一度讀めばそれで澤山である。喧嘩や火事の同一記事を毎日何度も反覆愛讀しようと思ふ人はあるまい。單なる記述は一度讀めばそれでいい。しかし、詩は何度繰返しても飽くことがなく、また無用と感じさせないやうなものでなければならぬ。

現代の詩壇に於て、純粹な感情だけの世界を歌ふ詩人の割合に尠いことを、私はいつも

川路柳虹

川路柳虹自署

遺憾に思つてゐるが、この作者がこの種の詩の最もよい代表的作品を示すことは、稍人意を強うするに足りる。詩は何といつても感情がその生命である。感情が涸渇すれば詩はない。そして、その感情も最も純の純なものは多感な青春時のそれである。詩人に年が若くて天才の多いのも、實はこの感情横溢の時代の作に、最も力強くまた魅力のあるものが生れるからである。

青春時の多感な一時期には、恐らく何人も詩人であり得るであらう。感情の世界は純であればあるほど尊い。そして、或時は夢みがちに、實は現實にない世界を心に描いて、そこに詠歎を恣にする^{Sentimentalism}ことさへある。これをセンチメンタリズムと稱するが、これは恐らく青春時の誰にも共通な現象であらう。そして、この多感な一時期は、この現在ある世界をそのままに受入れようとはしない。そのまゝ、受入れるといふことは、感情の力を借りず、理知の眼によ

つて事物を見ることであるが、青春時の人にとつては、寧ろ感情によつて事物を掩うて了ふ力が強く働く。だから、一種の偏見となることはあつても、一面に透入する力、即ち強い主觀の力は却つて鋭く働く。こゝに至つて詩の生れるのは必然の勢である。詩とは實にこの種の主觀力によつて描き出される美の世界、藝術の世界であるのである。

自修文

三〇 貴族院議事傍聽記

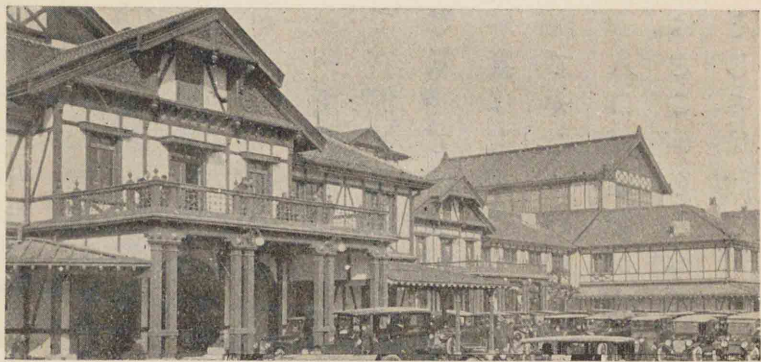
中村武羅夫

私は第四十八議會の第三日目に貴族院を傍聽した。午前十時の開會なので、定刻前に行つた。私は普通の傍聽券でなしに、新聞記者章を佩用して行つた。初めてのことであり、建物は廣く、廊下が縦横に通じ、左右に無數の部屋が並んでゐるので、ひどくまご

中村武羅夫、
北海道の人、
明治十九年、
生、文學者、
第四十八議
會、
大正十二年
二月二十七日
開院式、同
三月三十
一日解散
着用

ついた。少年時代から氣の小さかつた私は、役場とか、郵便局とか、あゝいふ役所風の受付のある處へ行くことがひどく怖しかつた。父の使などで餘儀なく行かなければならないやうな時には、私は泣出したいやうに心細くなるのであつた。行つてもおどくばかりして、碌々口も利けず、へまばかりするのであつた。今ではあまりそんなことはないけれども、それでも貴族院などといふ極めて官僚的な嚴めしい建物の中に入つて行くことは、あんまり愉快な氣持ではなかつた。帽子を冠つたまゝ入つていゝのか、襟卷や外套は取らなくてもいゝのか、そんなことに氣を遣つて、私は心の内でまごつた。

入口に巡查が立つてゐた。私は、その巡查に、新聞記者の控室にどこから入つていゝかを問うた。巡查は受付を教へてくれた。そして、受付で聞くと、案外丁寧に教へてくれたが、廊下が複雑な



關 玄 院 族 貴

で、私にはよく呑みこめなかつたが、ともかく入つて行つた。皆外套も襟巻も着け、帽子も冠つたまゝ、ずん／＼入つて行くので、私もその通りにした。

建物は随分廣いが、粗末で、それにひどくほこりつぽかつた。廊下の隅々には、銀筋の入つた特殊の制服制帽の守衛が立つてゐた。給仕のやうな少年が忙しさうに駈けて來たり駈けて去つたりしてゐた。どん／＼奥に入つて行くに従つて、新聞記者や議員やその他の職員とも見える人々が、廣い薄暗い廊下をざわざわと行違つてゐた。廊下の兩側に並

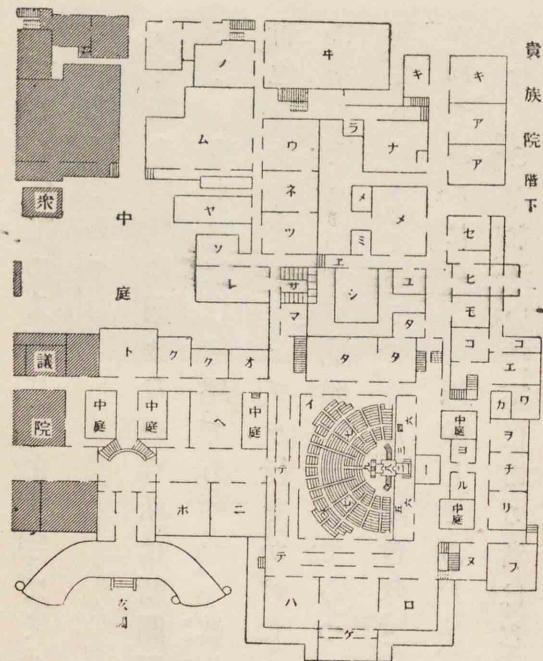
んでゐる各室の入口には、白文字でその部屋の名を記した黒い木札が掲げてあつた。

守衛や給仕に聞きながら、私は新聞記者控室にはいつて行つた。そこは粗末な狭い部屋であつた。真中に舊式な唐草模様のある青色の安つぽいテーブル掛をかけたテーブルを置いて、その周圍に安つぽい椅子が亂雑に置いてあつた。これまで私はもつと綺麗であらうと思つてゐた。議會などでは、新聞記者はもつと優遇されてゐるだらうと想像してゐたが、實際部屋を見て少し當が外れた。こんな汚い控室にゐる者はないと見えて、たゞ一人原稿紙に鉛筆を走らせてゐるだけであつた。壁には古ぼけた外套が五六着掛けてあつた。

定刻の十時ちよつと前に、私は議場に入つて行つた。階段の下にも上にも、入口にも、例の服装をした守衛が立つてゐた。守衛の

格天井
木を升形に組
入れてこれに
板を張つた天
井

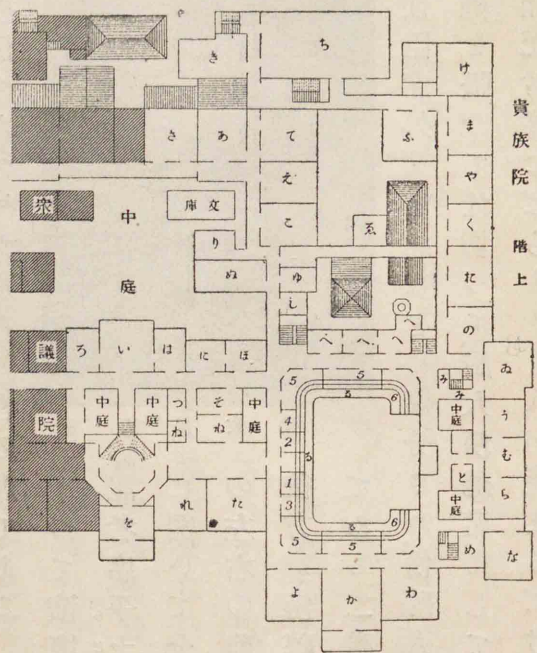
人數の多いのには驚いた。
天井は格天井式に木で組んで、不透明な擦硝子のやうなものが嵌めてあつた。柔かな鈍い光線が入つて來た。だが、それだけでは光線が足りないもので、天井の真中から垂下つた金ピカの節電燈



イ議	議場	議長應接室第三	議員化粧室
一王	座	議員官長室	議員昇降口
二議長	席	書記官長室	庶務課守衛係
三書記官長	席	友室	コ傍聴人脱帽室
四國務大臣	席	ヨ議務室	工同控室
五政府委員	席	タ議務課	テ議員更衣所
六書記官	席	シ庶務課文書係	ア物置
七議員	席	ソ同支室	サ議員便所
八演壇	席	ツ職員食堂	キ守衛直室
九速記者席	席	ネ庶務課圖書係	ユ湯沸所
口第一控室	室	ナ同會計係	ノ小使室
ハ第二控室	室	ラ製本室	ミ職員便所
ニ第三控室	室	ム速記課	シ暖房汽罐室
ホ第四控室	室	ウ同支室	エ職員昇降口
ヘ第五控室	室	ク議員洋食堂	ヒ受付所
ト兩院協議室	室	ノ同和食堂	モ議員應接室
チ議長室	室	オ新聞記者室	セ職員應接室
リ議長應接室第二	室	ク政府委員室	
又同	第二	ヤ文庫	

帝國劇場
東京市舞町區

が幾つかともつて、議場の内の光線を補つてゐた。



議場は粗末な帝國劇場のやうである。舞臺が丁度議長や大臣や政府委員や書記官の席で、舞臺の真中一番後に一段高く玉座が設けてある。——これは衆議院にはない。

イ便	議員官長室	議員昇降口
ロ便	議員官長室	議員昇降口
ハ便	議員官長室	議員昇降口
ニ便	議員官長室	議員昇降口
ホ便	議員官長室	議員昇降口
ヘ便	議員官長室	議員昇降口
ト便	議員官長室	議員昇降口
チ便	議員官長室	議員昇降口
リ便	議員官長室	議員昇降口
又便	議員官長室	議員昇降口

舞臺の上でも、議長の席が中央に——丁度玉座のすぐ前に——づぬけて高く、その隣に書記官長の席が少し低く、議長を中央に各大臣が居流れ、その端の方に政府委員の席が續いてゐる。大臣及び政府委員の席の後方が書記官の席である。議長席のすぐ前、少し下つて演壇があり、演壇の下が速記者席、平土間ひらどまに當る位置が扇形に開いて全部議員席になり、二階の左右の前方が新聞記者席、その後方が傍聴人席、舞臺と向ひ合つてゐる二階正面が衆議院議員席

外國使臣席、外交官席などに區分され、傍聴人席の端の方を少しばかり繩を張つて仕切つて、婦人傍聴席にしてある。

新聞記者席にばらばらと人が見えるだけで、がらんとした廣い



徳川議長
記者席、平土間に當る位置が扇形に開いて全部議員席になり、二階の左右の前方が新聞記者席、その後方が傍聴人席、舞臺と向ひ合つてゐる二階正面が衆議院議員席

議場に、ぼつり／＼と人が入つて來た。婦人の傍聴人もちらほら見えた。

やがて開幕を知らせるとでもいふべきベルが鳴る。四方八方の入口から議員が入つて來て、各自の席に着いた。



舞臺の方でもぞろ／＼とそれ副
副 どのの位置に着席した。徳川議長が來ないので、副議長の蜂須賀道侯が議長席に着いた。釣の好き正な殿様なので、同好の趣味から、うまくやつてくれ、ばい、と思つた。

清浦首相が現れる。背が高く、七十五歳だといふのに、體もしやんとし、血色もよく、なか／＼立派な風采、態度である。水野内相、松井外相、宇垣陸相、村上海相が順次着席した。その反對の側に、鈴

徳川議長
名は家達
名は正韶
蜂須賀侯
清浦首相
名は奎吾
水野内相
名は鍊太郎
松井外相
名は慶四郎
宇垣陸相
名は一成
村上海相
名は格一
鈴木法相
名は喜三郎

江木文相
名は千之
前田農相
名は利定
藤村遞相
名は義朗
小松鐵相
名は謙次郎
勝田藏相
名は主計

副島伯
名は道正

柳澤伯
名は保憲

木法相江木文相前田農相藤村遞相小松鐵相が順次着席した。蜂須賀侯の報告によると、勝田藏相は風邪のため出席しないといふことである。



議長の報告が済むと、前日に引續いて國務大臣の演説に對する質問演説が始まつた。當日は研究會の副島伯の質問演説が聞き谷ものだといふので、貴族院議事傍聽には最もいふことであつた。

最初に登壇したのが柳澤伯であつた。演説の内容も意氣込も大したものではなかつた。清浦首相は金鍍金の鉛筆を兩手の指先で弄びながら、時々隣の水野内相と何か耳打をしてゐた。各大臣も皆思ひ／＼の姿勢で、一向演

説に身を入れてゐるとは思へなかつた。

柳澤伯の質問に對し、水野内相が立つて答辯した。内相は見たところ小柄で、風采は揚らないが、辯舌は明晰で要領を得てゐた。

柳澤伯と内相との間に二三の間答があつた末、柳澤伯の質問は打切られ、當日の呼びものの副島伯が登壇した。三通りの草稿やら切抜やらを擴げて、約一時間半に亙る長演説で、色々な方面について、例を引き、統計を示して説明したが、餘りに微に入り細を穿ち過ぎるので、却つて演説が平板に流れ散漫に過ぎて、ありたけの蘊蓄を傾けた割合には、その効果が擧らなかつた。

副島伯の演説は、先づ首相に當り、内相外相海相遞相文相と片端から大臣に當つて行つた。早口なので、言葉の句切れが悪く、體を餘りに前後に動かし過ぎるので、少し不安定な感じを與へたが、それでも各方面に亙る質問は、脱線も混線もしないで、理路が整然と

散漫
ましまりのな
蘊蓄
いさま
積みたくはへ
ること

倦怠
あきること

岡本一平
北海道の人、
明治十九年
生、漫画家

してゐた。やつぱり才人だと思はれた。時々左右の大臣席を振返つては見えを切つた。何といはれても、どこを風が吹くかといふやうに、飽くまで平氣な顔をしてゐるのが清浦首相で、時々忌々しさうに舌打でもするやうに見えるのが松井外相、前田農相などであつた。

一時間半の演説は少し長過ぎた。議員は次第に倦怠を感じて來た。演説が終る時分、蜂須賀侯と代つて議長席に着いた徳川公は、手を動かしたり、體を動かしたり、書記官長に何か囁いたりした。何だか早く打切つて休憩にしたいやうな様子であつた。果して十二時に演説が終ると、待構へたやうに、すぐ休憩になつた。

私は午前中だけ見物して歸るつもりであつたが、芝居の見物よりも面白いので、午後も見て行くことにした。食事を済まして再び議場に入つて來ると、偶然岡本一平氏に逢つた。大正元年から

粕谷議長
名は義三
松田副議長
名は源治

山本内閣
山本権兵衛の
組織した内閣

毎議會詰めてゐるといふ議會通の一平氏は新參の私を案内して、貴族院及び衆議院の廣い建物の中を隈なく見物させ、主な部屋部屋を開けて見せて、一々詳しく説明してくれた。書記官長に斷つて衆議院議長室に入つて行くと、丁度粕谷議長と松田副議長とがゐた。一平氏は兩氏に私を紹介してくれた。

私が再び傍聽席に入つて行つた時には、丁度清浦首相が演壇に立つて、副島伯の質問に對して答辯してゐるところであつた。清浦首相の演壇に於ける態度はさすがに立派で、殊にその聲の響が朗かで、若々しく、何とも言へぬ快適さであつた。私は政治上の見解などは少しも交へずに、たゞ純粹の感情から、山本内閣は何となく好きであつたし、信用もしてゐた。中村武羅夫自署
中村武羅夫自署
が、清浦内閣は生氣がないやうな心地がして、ひどく頼みにならないやうに思つて

中村武羅夫

中村武羅夫自署

ゐたが、實際を見て、まんざらでもないやうな氣がして來た。だが、議場は何だか眞劍味が足りず、たわいが無いやうな氣もしないことはなかつた。それに議員の出席者が總數の半分もなく、席ががらあきなのも心細かつた。

江木村上・松井藤村などの各大臣が、次々と演壇に立つて答辯した。各特色があつてそれ／＼面白かつた。各大臣の答辯が一通り終つて、副島伯の質問が打切になると、やがて此の日の議事は終つた。(文壇隨筆)

三一 近代の和歌

○

麥の葉は天つ雲雀の聲ひゞき、
一葉々々に揺りもて伸ぶらし。

長塚節

長塚節
茨城縣の人、
大正四年三月十四
年歿。

麥の葉は天つ
ひゞりの聲ひゞ
きはひとほひ
とほに揺りも
てのぶらし節

麥の葉は天つ雲雀の聲ひゞき、
一葉々々に揺りもて伸ぶらし。

蹟筆節塚長

たらちねの母が釣りたる青蚊帳を、

清しといねつたるみたれども。

木下利玄

これやこの三人の吾子の墓どころ、

土のしめりに身をかゞめけり。

ほしいまゝに伸びあがりたる波の重み、

倒れたまるとゞろと鳴るも。

急なまねる山に面むかひ足もどきに
ちからをいれて岩ふみのほる利玄

蹟筆玄利下木

木下利玄
岡山縣の人、
大正十四年
歿。

急になれる山
に面むかひ足
もとにちから
をいれて岩ふ
みのぼる利玄

川田順
東京市の人、
明治十五年
生、友人、
製鋼所支配
人

寂光院のうし
ろに登る道は
あれどおち樅
くろくくさ
てぬたり
順

○ 夏野ゆく車の上は目をつぶり、

聞けばほのかに雲雀は鳴くも。

川田順

蹟筆順田川

湯の山の樺ひともと黄ばみたり

石うづたかき河原を前に。

伊藤左千夫

○ 砂原と空と寄りあふ九十九里の

磯行く人ら蟻のごとしも。

七人の子等がさきくば父母は

うもれ果つとも悔なくおもほゆ

伊藤左千夫
名は幸次郎、
千葉縣の人、
歌人、大正二
年歿、年五十

あたゝかき心
こもれるふみ
もちて人おも
ひをればうぐ
ひすのなく

吉田絃二郎
名は源次郎、
佐賀縣の人、
明治十九年
生、早稲田大
學講師

蹟筆夫千左藤伊

三二 浅春雜筆

吉田絃二郎

井戸傍で洗濯をしてゐた女達が、木立の中を通りすがりに、「すつかり木の芽の香がしだして來ました」と話して居るのが、私の耳に響いて來た。春が來たのだといふ感じが、しみんと病後の心に迫つて來る。
〔西比利亞〕
シベリヤの囚人達が復活祭を焦り待つといふ心持
なども、幾分想像されるやうに思ふ。

古い椿の葉が新しい葉と代る爲か、時折まるでしきかはら贅を打つ小石の

西が原
東京市外
染井
東京市外

やうな音を立てて落ちて行く。鶯が下葉から下葉へとさゝ鳴きをして渡つて居る。小鳥が松に来ては鳴いて居る。西が原から染井の墓地あたりの森にかけて、家も土も煙り始めて居る。土の香が私の魂をふうはりと包む。

草の中に寝轉んで本を讀むことの出来る春が近づいて來たかと思ふと、ちよつと少年時代に經驗したやうな胸を打つほどの喜も湧いて來る。生きて居ればこそといふ、生その物に對する心からの感謝も湧く。

「乞食のやうな生活をして宜いから生きてゐたい。」と、私は病中に考へたこともあつた。又或時は、「生涯人々の爲に托鉢僧となつて歩いて生きてゐたい。」と思つたこともあつた。此の考だけは、今でもまだ私の心の底に微に動いて居る。六十幾歳で世を捨てて旅に出て、それつきり一度の便りもしないで、何處で死んだか

西行
俗名は佐藤義
清の歌僧、建久
元年(六七三)
芭蕉
松尾宗房、伊
賀の人の、江
戸時代前期の
俳人(三五)
歿年(五十一)

到頭わからなくなつてしまつた親戚の老人のことなどを思ひ出す。西行芭蕉といふ人々の生活も思ひ出される。

併し、私は世捨人にはどうしてもなれない。世捨人になるには、私は餘りに幸福を求めて居る。私はまだ人間の巷が戀しい。

心の素直な仲間同志と一緒に、生に對する感謝を知る爲に、生きて居ることの歡喜を心ゆくまで味識する爲に、必ず讀まなければならぬ作品を産み出してくれる藝術家は尊敬すべきである。

眞面目に考へて苦しんで居る人、勤勉で心の美しい人、子供のやうな心の人は、みんな私達の藝術の世界の仲間でありたい。

怠惰な人間、ずるい人間、傲慢な人間、ごさかしい人間、懶巧振る人間、此のやうな人々に私達の藝術を興へてはならない。働かない人々にパンを興へてはならないと同様に、手の白いなまけ者に私達の藝術を興へてはならない。

今日も静かな麗かな日である。冬は何處へか去つて了つたやうな氣がする。梢にまつはるやうにして霧が森を包んで居る。田七八段隔てた小學校から、頻りに唱歌の聲が聞えて来る。卒業式の準備に歌つて居るのであらう。私達が小學校を出る時に歌つたのと同じ唱歌である。

人間はだん／＼青年から遠ざかるに連れて、歌も歌はず、祈もしなくなつて、じつと冷たい死の影を見詰めるやうになるものだと思ふと寂しい。

病後に土を踏むのは本當に嬉しいことである。土からは柔かな蓬の芽が出た。麥の芽が丸く毬のやうに固まつて、そこいらの野を青く彩つて來た。小さな家も、籬も、電柱も、ぼんやりと霞み初めた。

私は青く輝き初めた草の中にじつと立つて、柔かな微風に吹か

れながら、西が原から染井あたりの煙つた野良を見てゐた。到頭春が來たと私は思つた。其の刹那、私の臉の裏が熱くほてつて來た。春の日を見出し得た嬉しさ、生きることの嬉しさ、生きることの惱ましき。私の胸は微に顫へた。私は、最も強く生を感謝する心と、死を思ふ心とが、背中合せに隣り合つて居ることを知つた。

願はくは花の下にて春死なん、

そのきさらぎの望月の頃。

花見ればその謂れともなけれども、

こゝろの中ぞ苦しかりける。

私は西行の歌を思ひ出した。極端な生の享樂と極端な生の回避とは、常に隣り合つて坐つて居る。

中學一二年生ぐらゐの少年達を見て居ると、本當に好い感じがする。制服の腕が長過ぎたり、ズボンがだぶ／＼してゐたり、靴が

不調和に大きかつたりする所は、何となく新兵を思ひ出させる、エーモラスな感じを湧かせる。「何といふ可憐な天使であらう。」私は紅顔Humorousの少年達を見る度にさう思ふ。

あの腕の長過ぎる、だぶ／＼のズボンの制服を着て、眞面目な顔をして、街を歩いて居る金ボタンButtonsの少年達を見て居ると、私は何とかして一緒に話して見たくて堪らなくなる。あの黒い澄んだ眼、あの長い睫、あの輝かしい紅い頬、あの眞面目な可憐な議論……私は時々中學一二年生を教へて居る先生達を羨しく思ふ。(雜草の中)

三三 新帝踐祚

吾等七千万の國民は、大行天皇の崩御に遭うて、全く闇の中に取殘された思をしたと同時に、新帝踐祚の旨を拜承して、こゝに新しい希望と新しい光明とを見出した。

○この文は昭和元年十二月二十六日のある作

凡そいつの時代に於ても、皇位に即かせられる御方に對して、崇拜畏敬、心からの忠誠を盡し奉るのは、世界に比類のない吾が國風であるが、併し、新帝陛下に對し奉る吾等國民の感情は、この世界に比類のない吾が國風に於てさへ、猶且その例が稀であつて、單に崇拜畏敬するばかりでなく、誠に恐れ多いことではあるが、一種の御慕はしさ御親しさの心を加味した言ふに言はれぬ情味を持つて居るのである。而もそれは七千万國民を通じ、地位の上下、年の老若を問はず、同じやうな情味を持つて、何れも、吾等の天皇として仰ぎ見るのである。明治・大正の兩朝に歷仕した故老は、等しく陛下の英邁な御資質に絶大の御頼もしさを感じ、これから世に出ようとする青年は、皆陛下と時代を同じうして生れたことを無上の光榮としてゐるのである。

新帝陛下は御幼少の頃から極めて御聰明におはしまし、朝野の

望を一身にお集めになつていらせられたが、先年御渡歐あそばされて、具さに世界大戦後の社會状態を御踏査になつてから、御天分の御英發が一層著しく、大正十年十一月二十五日攝政の重任にお即きになつて、御父皇陛下に代つて万機を統べさせられ、ます／＼國民の信望を加へさせられると共に、陛下日常の御言動によつて、皇室と國民との關係は更に親愛の度を進めた。

大正十年九月、陛下は歐洲から御歸朝あそばされ、その御所感を國民にお示しになつたが、その劈頭はなはに於て、御外遊中、吾が國民の表した一喜一憂に對して御欣感あらせられた旨を述べさせられた。かやうな例は恐らく古來稀有のことであらう。その上、その後陛下が外にお出であそばす度毎に、陛下をお拜み申したさに集る群集が御敬禮申上げるのに對して、陛下は常に率直にお手を舉げさせられてこれに御應酬あそばされる。陛下のかやうな御態度に

ついても、恐らく國民は陛下に對し奉つて、世に類例のないほどに崇敬の意と親愛の念とを寄せ奉るのであらう。

陛下はまたその御所感に於て、世界大戦後の形勢によつて、世界平和のいよ／＼切要なことを感じさせられ、聯合國民が國難に際して發揚した犠牲の精神の偉大なのを御追想あそばされ、更に戦後孜孜として文明の興隆に努力してゐる有様を御看取あそばされた旨をお示しになると同時に、吾が國粹の精華、固有の國風を維持し、且維新の宏謨に則つて、彼の長を採り、吾が短を補ひ、以て國運の隆昌を期し、世界文化の發展に資すべきことを宣はせられた。

惟ふに、陛下の御登極後、その統治の基礎をなすべき御精神は、畢竟右のお詞の中にあることと拜察し奉る。即ち明治天皇の宏謨に従つて、御父皇陛下の御統治を嗣がせられ、一意世界の平和と文明の發展とに御貢獻あそばすことに努めさせられることであら

う。随つて吾が國運はますく、隆昌に、吾が國威はいよく、發揚するに至るであらう。吾等はその光榮のある時代の到來を期して、こゝに忠誠の微意を表し奉る。

三四 長慶天皇

芝 葛 盛

今から五百四五十年の昔我が國には、吉野朝廷の外に、足利氏の擁立した天皇が京都にまし／＼たので、天下は二つに分れ、戦亂が續いてゐました。吉野朝廷は常に勤王の士によつて護られてゐましたが、柱石の臣も漸く倒れ、南風はとかく振ひませんでしたところへ、正平二十三年三月十一日、後村上天皇がお崩れになりました。そして、その後を承けて御位に即かせられたのが長慶天皇であります。

長慶天皇は後村上天皇の第一皇子で、御名を寛成親王と申し、興

芝葛盛
東京府の人、
明治十三年
生、歴史家、宮
内省編修官

正平
後村上・長慶
兩天皇の年號
(1096-1097)
後村上天皇
第九十七代
興國
後村上天皇の
年號(1000-10
09)

文中
(1091-1094)

弘和
(1081-1084)

元中
後龜山天皇の
年號(1324-1328)
金剛峯寺
眞言宗古義派
の總本山、僧
空海の創建

國四年に御誕生になりました。天皇は御年二十六歳の時、御父帝が河内國住吉の行宮でお崩れになつた後を嗣いで御即位になりましたが、翌正平二十四年大和國吉野に御座を遷され、次いで河内國天野の金剛寺にお遷りになりました。所が、文中二年八月、足利方の細川氏春、赤松範資などが攻めて來ましたので、また難を避けて吉野に行幸せられました。そして、弘和三年、御年四十一歳、在位十六年で、御位を皇太弟後龜山天皇にお譲りになりました。

長慶天皇は御讓位後も太上天皇として軍務を統べさせられ、翌元中二年には、高野山の丹生明神に戦捷を御祈願遊ばされて、宸筆の御願文を納められました。この御願文は現今高野山の金剛峯寺に遺つてゐますが、その立派な御筆蹟を拜しましたも、天皇が英邁な君主であらせられたことが想像されます。

天皇はかやうに軍國の政に御多忙な歲月をお過しになりました

たが、一面には文學の御趣味が深く、屢和歌の會を催され、御自らも千首の歌をお詠みになりました。天皇の御叔父に當らせられる宗良親王が「新葉和歌集」をお撰びになつたのは、實に天皇の勅命によられたのでありました。また天皇は「仙源鈔」といふ御著述を遊ばされましたが、これは紫式部の源氏物語の註釋書であります。天皇の御製の今日に傳はつてゐるものは三百首に上つてゐます。その中には、所謂花鳥風月の御作も少くはありませんが、特に注意し奉るべきものは、その時代を背景とした特殊の御閱歷と御境遇との間にお詠みになつた感懐の御作であります。

治まらぬ世の人ごとのしげければ、

櫻かざして暮らす日もなし。

の如きは、も、しきの大宮人はいとまあれや、櫻かざしてけふも暮らしつ。」といふ古歌と對照して、誰が感慨を禁ずることが出來ませ

も、しきの
山部赤人の
歌、新古今集
にある

う。而もそれが花の吉野にまし／＼ての御作と思ふと、その感じも一入深いではありませんか。

わが宿と頼まずながら吉野山、

花になれぬる春もいくとせ。

久方の天の岩戸を出てし日や、

かはらぬかげに世を照らすらん。

我が日の本の天つ日嗣をつがせられた大君が、吉野の片田舎に佗しく世を送り給ふ御身として、かはらぬかげに世を照らすらん。」と仰せられたのを聞いては、當時誰が勤王の心を起さないで居られましたらうか。

このやうに御不運であらせられた天皇の御事蹟が今日まで埋れて、その御在位さへも不明であつたことは、誠に恐れ多いことでありました。これは吉野朝廷が常に北軍に壓迫されて、畏くも御

座を轉々として遷されたことや、吉野朝廷の御事蹟を語り傳へた書物が遺つてゐなかつたためでありました。併し、新しい史料も發見され、また歴史の學問も進んで來ましたため、この天皇の御在位が立派に證明されて、御歷代に加へさせられることになつたのであります。即ち長慶天皇を第九十八代の天皇として仰ぎ奉ることになつたのであります。久しく叢雲に掩はれてゐた天つ日影を再び仰ぎ見ることが出来るやうになつたのは、我等國民一同の喜びに堪へないことであります。

なほ長慶天皇が御一人御歷代に加はらせられても、紀元年數が十六年伸びるのでなくて、後龜山天皇の御在位年數が減じたのであることを、念のため申し添へて置きます。

現代國語讀本 卷六 終

現代國語讀本



大正十二年十一月廿七日印 刷 大正十二年十一月三十日發行
 大正十三年一月一日訂正再版印刷 大正十三年一月四日訂正再版發行
 大正十五年十月二十日修正三版印刷 大正十五年十月廿三日修正三版發行
 昭和二年二月一日訂正四版印刷 昭和二年二月四日訂正四版發行

現代國語讀本
 卷一：二金四拾七錢
 卷三：六金四拾六錢
 卷七：十金四拾參錢

昭和五年一度臨時定價
 金七拾五錢

著 者 八 波 則 吉

發 行 者 株式會社 東京開成館

代表者 松本繁吉

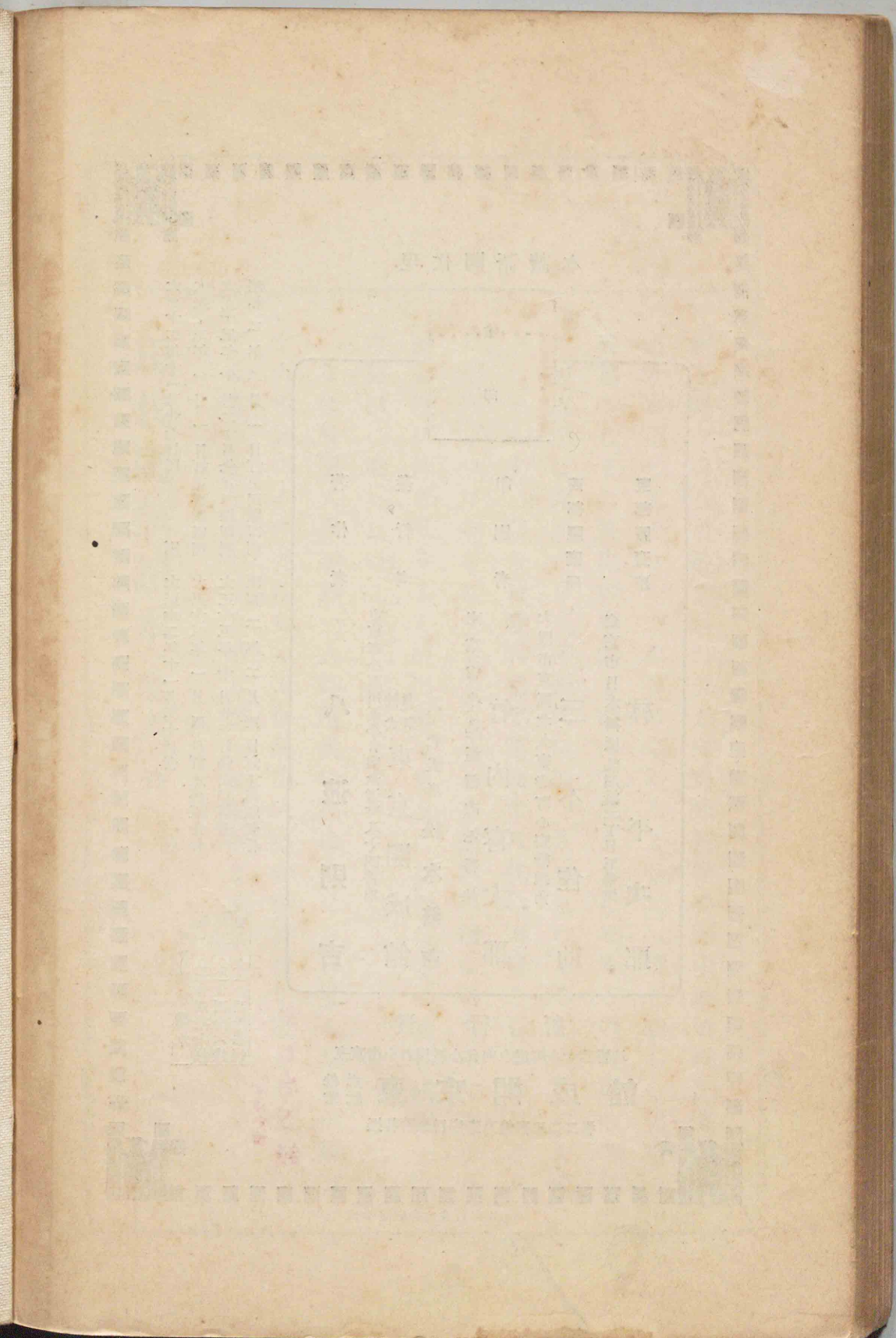
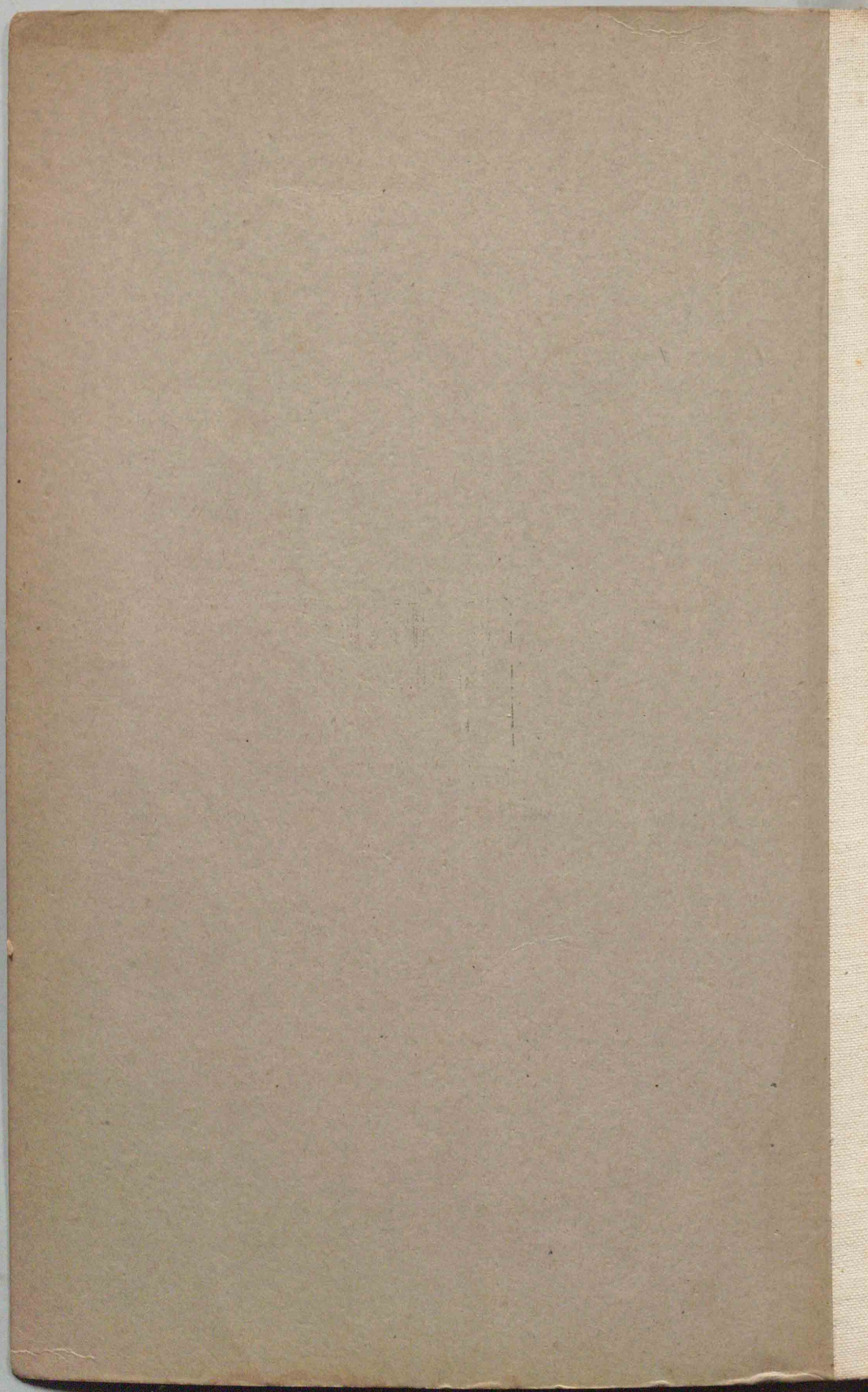
印 刷 者 東京市牛込區榎町七番地 竹内喜太郎

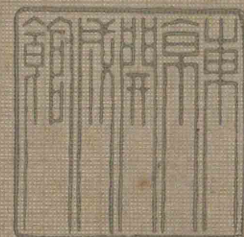
西 部 販 賣 所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角 三木佐助

東 部 販 賣 所 東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地 林平次郎

發 行 所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地 株式會社 東京開成館
 振替口東京東區三三五番二





広島大学図書

2000090695

